

364-257



\*1200601137965\*



始



# 生きた書翰文

前田晁著

アールス作例叢書

1



TOKYO  
A R S  
1917

364

257



I 種  
W



\*1200601137965\*

例 言

例

言

一、書翰文の手本にするにはどういふ文章がよいか。いふまでもなく、現に行はれてゐる「生きた書翰文」に越したことはない。わたしはさういふ考からこの書を作つた。

一、この書の中に收められてある百五十通の書翰文は、大正四年七月の末から同六年七月の末まで、丁度二ケ年の間に、わたしの所へ寄せられた先輩や友人の書翰の中から、公けにして差支なく、而かも後生の爲めに最も有効な参考となると思はれるものを選び出したのである。そして其の一々の書翰文に對しては其の書翰の書かれた時の事情や状態を、なるべく簡単に、なるべく明瞭に書き添へて置いた。讀者が興味を以て讀みながら、自然と其の體様を會得するやうにと思つたからだ。

一、卷末に索引を附けて置いた。ある種類の文例を捜し出さうとする時には、索引の中の、其の項目の下にある数字に依つてベエシを繰るがよい。例へば轉居の通知ならば、100, 122, 184, 277. の各ベエシを繰るがよい。忽ち其處に、好きな文例が出て來るであらう。

一、卷頭の書翰文話は「書翰文」といふ一種の型に囚はれて、書翰文をむづかしいものと思つてゐる人達に一應讀んで置いて貰ひたいと思つて添へた。型に囚はれた死んだ書翰文を書くのはむづかしいけれど、生きた書翰文を書くのは、生きた言葉を持つてゐる者には極めてやさしいことである。

大正六年八月二十日

著 者 識

索 引

賀 状

年賀——95, 96, 98, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 207, 209.

通 知

出産——261.  
死亡——142.  
轉居——100, 122, 184, 277.  
營業所設置——176, 258.  
展覽會開催——260.

報 知

出發——65, 113, 170, 263.  
到着——60, 263.

案 内

歸宅——117, 182, 223, 233.  
近況——55, 86, 181, 186, 224, 278, 279, 282.  
留守宅の様子——39.  
病狀——47, 53, 61, 141, 160, 255, 281.

招 待

新年會——92, 93.  
祭事——124, 253.

贈物に添へて

季節のもの——80, 103, 166, 274.

記念品——213.  
観劇券——286.

### 見舞

秋の頃に——45, 46, 167.  
近況——43, 79.

### 勧誘

避暑——35.  
來遊——131, 136, 138, 150.

### 相談

歸京日——66.  
會合——91, 108.  
引越——236.

### 詫び

就職口を断る——82.  
留守して——114.  
約束の取消——270.

### 紹介、推薦

紹介状——169, 213.  
推薦状——106, 123, 240, 246.

### 禮状

見送りを受けて——116.  
會葬を受けて——143.  
香奠を贈られて——197.  
書物を贈られて——153, 155.  
入選を祝されて——173.  
手数をかけて——276.

### 依頼

口添を頼む——134.  
紹介を頼む——164.  
原稿の事——74, 64.  
會談を頼む——219.  
援助を頼む——245.  
旅行中の留守——254.  
書物の事——265, 271, 272, 275.

### 催促

原稿——101.

### 問合せ

友人の宿所——139.

### 旅使り

内地から——88, 97, 121, 125, 144,  
146, 147, 152, 156, 157, 212, 218,

231, 235, 239, 242, 243.  
外國から——90, 110, 127, 123, 179,  
248, 259.

### 其他

勇健な野蠻人となつて——54.  
寄寓承諾の返事——63.  
思ひ出——49, 72, 77, 162, 214, 237.  
適當の人物を求む——159.  
ある文章の讀後感——189.  
不思議なめぐり合せ——210.  
書物に添へた口上——216.  
書物の批評——221, 251.  
靈動の影響——230.  
小學教師の便り——232, 249.  
自由の道に出た喜ぶ——267.

生きた書翰文目次

書翰文話

書翰文は書き易い……………二  
 候文と口語文……………一三  
 文例に囚はれるな……………二五

作例百五十通

一 避暑には適當な地……………三  
 二 聊か肌寒い感じが……………三九  
 三 何となく秋らしく……………四三  
 四 無言がちの朝夕を……………四七  
 五 山國の初秋も……………五三  
 六 例の持病の脚氣起り……………五七  
 七 暮れて行く湖の上……………六九  
 八 やつと明日退院……………七三  
 九 勇健な野蠻人となつて……………七九

十 昨日から氷川様のお祭……………五五

十一 日本の最大弱點……………五九

十二 病院の窓から……………六一

十三 芋あり明月あり……………六三

十四 立つ前に是非……………六五

十五 幾日頃歸京の事に……………六六

十六 何といふ淋しい思出……………七二

十七 お噂申すが無上の樂み……………七三

十八 定めて毎日御多忙の事と……………七九

十九 鐵道便で茸を少し許り……………八〇

二十 就職口の斷り……………八二

二十一 冬籠の支度に忙殺され……………八六

二十二 加茂の水音を聞き乍ら……………八八

二十三 龍土會の通知(一)……………八九

二十四 モスクワからの第一信……………九〇

二十五 暮が正月かに……………九一

二十六 十人ほど招きて……………九二

二十七 元旦拂曉の新年宴會……………九五

二十八 旅からの年賀狀……………九五

二十九 ロオマ字の年賀狀……………九六

三十 雪未だ至らず……………九七

三十一 露曆正月二日……………九八

三十二 轉居の通知(一)……………一〇〇

三十三 早く進行しなければ……………一〇一

三十四 滅多にない暖い寒中……………一〇三

三十五 龍土會の通知(二)……………一〇五

三十六 婦人記者として(一)……………一〇六

三十七 女中が見當らず……………一〇八

三十八 軍人が大もての時代……………一〇〇

三十九 佛蘭西の旅も終に近づき……………一一三

四十 妻の母の一週忌にて……………一一四

四十一 又しても雪が降り……………一二六

四十二 甲州の春は酣……………一二七

四十三 私らが發起者として……………一二八

四十四 野州躑躅の美しさ…………… 一三二

四十五 轉居の通知(一)…………… 一三三

四十六 婦人記者として(二)…………… 一三三

四十七 亡妻の一週忌に…………… 一三四

四十八 高原の氣象を…………… 一三六

四十九 大ぶ切迫した心持も…………… 一三七

五十 今日風が吹いて…………… 一三八

五十一 總見の案内状…………… 一三〇

五十二 七月の一日には…………… 一三一

五十三 お口添を願ひたいとの事…………… 一三四

五十四 風呂も立つやうに…………… 一三六

五十五 中央の知名の方と…………… 一三八

五十六 鳥崎氏歸朝の由…………… 一四〇

五十七 今度は腎臓炎…………… 一四一

五十八 死亡の通知…………… 一四三

五十九 會葬のお禮…………… 一四三

六十 始めて甲信の高原を…………… 一四四

六十一 湖上の風は涼しく…………… 一四六

六十二 頭の中に火事が起つて…………… 一四七

六十三 随分驚異の眼を以て…………… 一四九

六十四 今夜月明かに…………… 一五二

六十五 「陷穽」の寄贈を受け…………… 一五三

六十六 御登昇の御紀念たる…………… 一五五

六十七 老女江島の墓を…………… 一五六

六十八 犬の吠えないのが…………… 一五七

六十九 人物次第にて昇給…………… 一五九

七十 この地の病院に入院…………… 一六〇

七十一 茸狩の思ひ出を…………… 一六二

七十二 紹介して頂き度く…………… 一六四

七十三 去年の焚火の跡が…………… 一六六

七十四 諏訪の秋も深く…………… 一六七

七十五 紹介状…………… 一六九

七十六 唐突の歸郷に際して…………… 一七〇

七十七 歡迎會の通知…………… 一七一



七十八 文展入選に對して……………一七三

七十九 正直の物言ひをして……………一七四

八十 私自身の圖案を……………一七六

八十一 大地を久振りにて……………一七九

八十二 病院は静まり返つて……………一八〇

八十三 午後一時頃木挽町へ……………一八二

八十四 轉居の通知(三)……………一八四

八十五 僕は世間に向つて……………一八六

八十六 「高い會費」の作者へ……………一八九

八十七 永く御芳志の紀念と……………一九七

八十八 年始狀(一)……………一九九

八十九 年始狀(二)……………一九九

九十 年始狀(三)……………二〇〇

九十一 年始狀(四)……………二〇一

九十二 年始狀(五)……………二〇一

九十三 年始狀(六)……………二〇四

九十四 年始狀(七)……………二〇四

九十五 年始狀(八)……………二〇五

九十六 年始狀(九)……………二〇七

九十七 年始狀(十)……………二〇九

九十八 不思議にも之で三度……………二一〇

九十九 四風の吹きある日は……………二一一

百 會友の紹介狀……………二一三

百一 昨夜宿直部屋で……………二一四

百二 精神論だけ御一覽……………二一六

百三 懇親雜談會の通知……………二一七

百四 山の雪美しく……………二一八

百五 一度御會談被下候様……………二一九

百六 讀み方が淺薄で……………二二一

百七 不相變忙しくて……………二二三

百八 半島の寒さは又格別……………二二四

百九 例の靈動の影響が……………二二〇

百十 寒いけれど静か……………二二二

百十一 黒い詰襟を着て……………二二三

百十二 大茶目を演じて……………二五三

百十三 旅に半月ばかり……………二五五

百十四 お引越しになるなら……………二五六

百十五 女らしい向上心を……………二五七

百十六 雪道を越えて……………二五九

百十七 今次の総選挙は……………二六〇

百十八 休息するつもりで……………二六二

百十九 舞鶴で下りた爲め……………二六三

百二十 御援助を賜り度く……………二六五

百二十一 他日國家憲政の爲め……………二六六

百二十二 萬里異郷の情……………二六八

百二十三 今では増築されて……………二六九

百二十四 亡妻の十日祭に……………二七〇

百二十五 曾て一度讀んだ時も……………二七一

百二十六 留守中宜しく……………二七四

百二十七 また少し發熱して……………二七五

百二十八 營業所設置の通知……………二七八

百二十九 鈴蘭の花を胸へ……………二五九

百三十 展覽會を開催致し……………二六〇

百三十一 出産の通知……………二六一

百三十二 私は今夜行列車に……………二六二

百三十三 お正月に歩いた時は……………二六三

百三十四 痛切な問題だから……………二六四

百三十五 古本で見付けるには……………二六五

百三十六 自由な廣い道を……………二六七

百三十七 考へて見ると……………二七〇

百三十八 新本にて結構に候……………二七一

百三十九 英語獨習の書物を……………二七二

百四十 記念の爲め文鎮を……………二七三

百四十一 香りの高い山獨活を……………二七四

百四十二 日蓮遺文集なら……………二七五

百四十三 書物の代を小爲替で……………二七六

百四十四 轉居の通知(四)……………二七七

百四十五 伯母の世にある間は……………二七八

生きた書翰文目次終

百四十六 微々たる役人として……………二六九

百四十七 却つて苦痛を覺え……………二七〇

百四十八 出席不可能ゆゑ……………二八一

百四十九 此方も日中は暑く……………二八二

百五十 觀劇券に添へて……………二八六

年以止令々々々々

山花袋氏

書葉の氏袋花山田

書葉の氏袋花山田

何よき、伊藤西の旅も終るは、  
 何かと心せわしくなして、  
 其のよき道程も送り得  
 おなほ多き幸に無事  
 ですか、  
 休め  
 べき  
 四月の末  
 頃には留地を出る、  
 しとりと思つておなほ再  
 母國を見得るの目も漸く近づく  
 ことを感じます



329  
 J.-J. ROUSSEAU  
 Né en 1712 à Genève.  
 Son éducation fut très négligée et il fit un peu de tous les métiers.  
 En 1749, il se fit copiste de musique et commença ses travaux de la Littérature.  
 Il composa la Nouvelle Héloïse dans le célèbre roman écrit pour lui,  
 par M<sup>me</sup> d'Épinay. Il donna des idées, il se rendit à Genève  
 et fit dans l'année deux œuvres capitales dont l'une, Le Contrat Social  
 proclamait la Souveraineté du Peuple et posait ainsi les principes  
 d'où sortit la Révolution. Il fut un esprit indépendant, fier et ombreux.  
 Aucun par ses idées et son travail, devança à une transformation sociale.  
 Mais dans sa vie privée, il fut des défauts.  
 sa liaison avec une femme indigne de lui et dans la mort de ses cinq enfants.  
 Il mourut en 1778 et ses restes furent portés au Panthéon en 1794.

先づは、  
 伊藤西の  
 旅も終る  
 は、  
 何かと心  
 せわしく  
 なして、  
 其のよき  
 道程も送  
 り得る  
 幸に無事  
 ですか、  
 休め  
 べき

書葉の氏村藤崎島

生きた書翰文

書翰文は書き易い

今こそさうでもなくなつたが、つい近頃までは、書翰文は必ず候文でなければならぬもののやうに思はれてゐた。そして、さういふことを信じて疑はない人々は、大抵この特殊の文體其のものを以て、書翰文と他の一般普通の文章とを區別しようとした。併し、それが因襲に囚はれた偏見であることは、近頃、所謂口語體の書翰文が幾らでも自由に書かれつゝある事實に依つて明らかに證明されてゐる。それなら、書翰文と他の一般普通の文章とは何に依つて區別さるべきであらうか。わたしは一般普通の文章が天下の公衆を相手として書かれるものであるに反して、書翰文は特定の一人、もしくは一人と看

做すことの出来る團體を相手として書かれるものであるといふことを以て、其の根本的約束、従つて他の文章との根本的相違であると思ふ。一般普通の文章を晴れの舞臺に於ける演説に譬ふれば、書翰文は狭い一室内に於ける會話のやうなものである。演説は一生一度も爲なくとも濟む人は澤山あるが、會話は大抵の人が、一日といへどもこれをせず暮らすいふことは先づむづかしい。すでに會話はこれを一日も缺くことが出来ぬとすれば、同じ性質、といふよりも寧ろ會話の代用といつた方が適切である書翰文の必要なことは、また改めて言ふを要さぬであらう。

所で、會話は演説よりも、概して造作なく出来るものであると同じく、書翰文もまた一般普通の文章よりも造作なく書けるものである。

かう云つたら、或は世間にはこれに反對する人があるかも知れない。勿論、會話にしる、演説にしる、其の巧妙の域に達して、其の道の雄となることは容易くはあるまい。けれども尋常一通りのことならば、會話は毎日何人もこれを繰返してゐるのであるから、出来るも出来ないもないのである。所が演説はさうは行かない。わたしはこれと全く同様なことが書翰文と一般普通の文章とについても云へると思つてゐる。わたしは凡そ世の中で、書翰文位造作もない文章はないと思つてゐる。然るに、それを至極むづかしいもののやうに世間の人の思つてゐるのは何故であらうか？ 按ふに、役にも立たぬ形容の字句を並べて、徒らに見て美しい文章を作り上げようとするからではないか。書翰文本來の約束を忘れて、差當つての用事なり、心に思つてゐること

なりを其の儘に文字に書き現はさうとせず、何とかして一つ綺麗な文章を書いて相手を驚かしてやらう。自分の文才のすぐれてゐることを見せてやらうと、詰らぬことを考へるからではないか。尤もさういふ風なことを心懸けて、それが爲めに文章を書きにくいものにするのは獨り書翰文のみには限らない。けれども、他の一般普通の文章に在つては、中身は兎に角として、文章其のものの面白味で讀ませることも全く無い譯でもないから、其處にまた多少の意味もあれば、恕すべき點もある。が書翰文に在つては、如何に文章が面白く讀まれても、それが爲めに肝心の用事を達することが出来なかつたり、不十分であつたりしては何にもならない。丁度、用事を抱へて人を訪問しながら、下らぬことを長々と身振り手振り面白く話してゐるうちに、何時かそ

れに身が入つて了つて、肝心の用事の方はつい忘れて了つたり、話し出す機会を捉へ損つたり、或はやつと話し出しはしたものの、相手の人に要領を得させもせずに済まして了つたりするやうなものである。勿論會話をするにしても、書翰文を書くにしても、辭令に巧みであることは必要に相違ないが、さりとしてまた用もない形容の言葉や字句に骨を折つて、肝心の主意を徹底させずに終るのは愚であるといはねばならぬ。

書翰文をむづかしいものと思はせる今一つの理由は、古來、書翰文に必須な要件として擧げられてゐる敬意の意義を誤解して、もしくは早合點して、文字の上でばかりこれを表はさうとするものである。勿論書翰といふものは、前にも述べた通り、他の一般普通の文章が廣く世

間に示すものであると違つて、一人もしくは一人と看做すことの出来る相手に送るものであるから、其の相手の人と自分との關係に依つてそれに相應した敬意はこれを要するのであるが、併しこの敬意といふものは元來文字の上にあるものではなくて、相手の人に對する自分の心持の上にあるものである。従つて敬意といふものは、相手に依つて其の度合にさまざまな相違が生じて来る。敬語さへ使へばそれで敬意を表することが出来るものではない。相手が目下の者であれば呼び捨てにしても別段敬意を失はない。また相手と同輩であれば、あひたいづくの言葉遣ひをしても猶ほ十分の敬意は表はせる。更にまた相手が目上のものであれば、その人相當の敬語を使つて始めて敬意を表はすことが出来る。早く云へば、書翰文に必須な敬意といふものは、敬語



と同じものではないのである。然るに此の意味を穿き違へて、書翰文には敬意を缺いてはならぬといふ所から、相手の目上であると同輩であるとも目下である時に頓着せず、何でもかでも敬語さへ使へばいゝものとの心得て、其處で自分の頭にはない敬意を言葉だけで言はせようとするものだから、つい従前から用ゐ古されてゐる型にはまつた敬語を漫然用ゐて、それで敬意を表さうとするやうになる。

けれども考へて見給へ、これはもとより自然でない。虚偽の沙汰である。會つて話をする場合に、友達に向つて恐れ入り奉つたり、目下の者に向つて頓首再拜したりするやうなことがあるものでない。然るに、書翰を認むるに方つては敢て其の不自然な行爲や虚偽な動作をしやうとするのである。筆がすら／＼と下りやうがないではないか。こ

れは實に書翰のむづかしいものになる所以である。書き易い筈の書翰文がむづかしくて書けなかつたり、書けなくならぬまでも億劫になつたりする所以である。例へば書物を借りようとする場合に、相手が目下の者だつたら、

君、何々(書名)があいてゐたら、二三日貸して呉れないか。

で結構だし、又、相手が友人だつたら、

君、もし何々(書名)があいてゐたら二三日貸して呉れ給へ。

と云へば、少しも敬意を失ふこともなく、十分に用事も足りる。もし又、相手が先生であるとするれば、

先生。誠に恐れ入りますが、何々(書名)が今若しおあきでござい

ますならば、二三日拜借いたしたうございます。御都合はいかが

でございませうか。  
といふ風に、會つた時に口で述べる通りに書きさへすればそれでよいのである。それをこれでは何となく物足りない、敬意を表はす爲めに古來使はれて來た敬語が殆んど使はれてゐないので、或は失禮になりはしまいか——さういふ懸念の下にさまざまに屈託した舉句、友人に送る書翰を次ぎのやうに書いたとする。

拜啓仕候。○ 誠に恐入り候へども、御秘藏の何々(書名)只今若し御閱覽中に御座なく候はゞ、二三日の間御恩借の榮を賜はり度く、幸に御許容被下候はゞ難有き仕合せに存じ奉り候。○ 早々頓首。

なるほど、世に行はれてゐる作文書の文例などには或は叶つてゐる

かも知れない。従つて一寸見た所では如何にも法に合つてゐて、敬意も十分に表はされてゐるやうである。けれども、これを受取つた友人の身になつて考へて見給へ。何と思ふであらうか? 屹度侮辱されたやうに感じて却つて憤るであらうと思ふ。何故かといふに、友人同士が相對して話をする場合に、かういふ言葉を使ふことがないからである。實際に使ひもせぬ言葉、友人同士の間には存在して居ない言葉、即ち死んでゐる言葉を使つてゐるからである。さういふことで生きた人の心持が満足に傳へられよう筈がない。見給へ、右の文をどう讀み直して見ても、其處に友誼といふやうな温かい感情が少しでも現はれてゐるとはどうしても思はれないことを。即ち右の文のごときは、よしんば法には合つてゐても、要するに生命のない文字を列ねた虚偽の文章

に過ぎない。

所が、書翰文をむづかしいもの、やうに思つてゐる人々は、實は大抵かういふ虚禮澤山虚飾澤山の文章を作らうとして苦しんでゐるのである。人と話をする時に、敬語を使ふか使はぬか、相手の人次第できまることは前に一度述べたことであるから、茲にまた繰り返しはせぬが、さういふ場合に、一句々々詩のやうな綺麗な言葉を口にして、相手の人の讚歎を得ようとし、それが爲めには、肝心の用事が辨じても辨じなくとも構はぬといふやうな人は、今の世に滅多にあらうとも思はれない。然るにこれを文章にする場合になると、苦しい思ひをしてさうしたがるといふのは誠に譯の分らぬことではないか。思つたまゝ感じたまゝを其の儘に書き現はすことは、凡そ文を作る眞髓ともいふ

べきものであるが、殊に書翰文に於いてわたしは其の眞實なことを思ふのである。

### 候文と口語文

今日一般に行はれてゐる書翰文は、大體に於いて二種に分つことが出来る。一つは候文で、他の一つは口語文である。この二つのものには、共に長處もあれば短處もあるが、併し私は常にかう思つてゐる。一體書翰文といふものは、日常の會話と等しく、今日只今の用を辨ずる爲めに用ゐられるものであるから、従つて其れに用ゐる言葉も矢張り今日只今のものでなければならぬと。中には、口語文だと、やゝもすれば野卑粗笨に陥り易いとか、禮儀に悖るやうなことがあると

か、莊重とか謹嚴とかいふ重々しい意味を現はすことが出来ぬとかと言つて、候文の必要を説くものもあるが、さういふ人達は、恐らくは敬意は敬語を使ふことに依つてのみ現はせるといふやうに、物を形の上からばかり考へてゐる人達ではなからうか。さもなければ、前人の所説を自分でよく考へて見もせず、誤りなしとして其の儘に信じてゐる人達であらう。

わたしの見る所に依れば、野卑粗笨に陥り易いとか、禮儀に悖るやうなことがあるとか、莊重謹嚴などいふ重々しい意味を現はすことが出来ぬとか、すべて口語文の缺點であり、弊であるといはれてゐるものは、實はそれが口語文だからではなくて、即ち口語文其のものに特有なものでなくて、其れを書く人が野卑粗笨に陥り易い性格であつ

たり、禮儀に嫻はなかつたり、莊重謹嚴などいふ意味のことを言ひ現はすに不釣合な人物であつたりする爲めであらうと思ふ。従つて、さういふ人々に書かせれば、よしんばそれが候文であつても、矢張り同じ缺點や弊害に陥るのを免れることが出来ないであらう。何故かといふに、其の由つて来る所が文體の如何に依るのでなくて、寧ろもつと根本的な、書く人の人格の如何に依るのだからである。

わたしはいつもかう思つてゐる——苟くも文章を書くからには生きた文章を書きたい。死んだ文章を書きたくないと。按ふに、諸君もこれには無論同感であらう。すでに同感であるとすれば、何故生きた文章を書きたいかといふ穿鑿は茲にこれをする必要はない。けれども、どうすれば生きた文章が書けるかといふことについては、少しく研究

して見なければならぬ。

そこで、先づ問ふべきは、生きた文章とは一體どういふ文章のことであるかといふことである。茲には専ら書翰文について考へて見ると、矢張り普通に云ふ真情流露といふ文がそれに當る。相手の人に告げようとする用事なり心に思つてゐることなりが、さながらに書き現はされてゐる文が其れに當る。一口に云へば、生きた感情なり思想なりが生きた言葉で書かれてゐる文章が其れに當るのである。かの古來簡潔な書翰文の典型として傳唱されてゐる本多作左衛門が陣中より妻女の許に送つたといふ、

火の用心、おさん泣かすな馬肥やせ。

のごときは即ちそれに庶幾い。この文に於いては、形式を重んずる人

達がやゝもすれば穿鑿したがるやうな長い歴史の下に發達した書翰についての各種の典例は全く無視せられ、特殊の文法もまた破られてゐるが、しかも書翰としての任務は十分に果たしてゐるのみならず、兵馬倥傯の間に在りながら、特にこの三ヶ條を擧げてはるかに音信を留守宅に通じたといふ所にも無限の妙味がある。而してこれが生きた文章であるといはれる所以は、一讀過すれば分る通り、型にはまつた言葉を捨て、率直に日常の通用語を使つた所にあるのである。

かつて東京高等商業學校長として令名のあつた故人矢野二郎氏が書翰に關する意見を述べた中に、かういふことを云つてゐる。曰く、  
『日常の通用語を俗語と云つて馬鹿にするが、其の俗語ほど、適切に現時の人情思想を現はしてゐるものはない。これを巧く用ゐて行

つたら手紙でも文章でも生きて来ようといふものだ。いつかの選挙に苦戦して大勝利を得た人があつた。その趣きを知らして来たからさしあたり「當選を賀す」とでもいふところだが、矢野にはそれでは物足らん。そこで「シメタシメタ」と電信をかけてやつた。又或る人が親の病氣を、それはよく看病したが、とうとう亡くなつた。その知らせを受けた時、矢張り電信で「ヤレヤレ」といつてやつた。わたしの手紙は凡て此の流儀で情のうつらぬ手紙なんぞは貰つても一向嬉しくない。』

と、いくら俗語がいゝからといつて、まさかに「シメタシメタ」だの、「ヤレヤレ」では、あまりに曲がなさ過ぎて、直ちに賛成を表し兼ねるが、併し、日常の通用語を巧く用ゐてこそ始めて手紙でも文章でも生

きて来ようといふものだ。と喝破された所は、これを語られたのが十數年以前のことであつた。けに、ますく其の卓見なることを示してゐる。確に敬服するに足ると思ふ。

けれども時勢の推移は實に早い、今日に於いてはもはやかういふ議論を繰返す必要はないやうになつてゐる。見給へ、今日の若い時代、即ち聰明な青年や少年達が文章を發表する機關となつてゐる諸種の文學雑誌を。それらに掲載されてゐるものは小説、叙事文、抒情文、評論文等は勿論のこと、書翰文さへも皆な悉く口語體を用ゐてゐる。のみならず、我々が今日個人間で實際に往復してゐる書翰も其の十中八までは口語文である。そしてそれらの書翰文を見るに、在來の候文に比べて遙かに意志の疎通が自由で、情味もまた饒かに出てゐると

同時に、今まで口語文の缺點と思はれてゐた所は次第々々に減じて行  
きつゝあるのが見える。而して更に一方に於いては、候文でなければ  
書翰文ではないと思つてゐる舊弊な人は、日一日に少くなりつゝあ  
る。されば書翰文が全く口語文で書かれるやうになるのも最早さう遠  
い將來ではあるまいと思ふ。

所がまた世間にはかういふことを言ふ人がある——なるほど候文  
には今の時勢に合はぬやうな缺點は澤山ある。併し、長い歴史のある  
一つの文體だから、多少の缺點はあるにしても、さう一概に貶すこと  
はない。これまでの缺點であつた所は十分に修補して、やはり書翰文  
の一體として將來ますます發達させるやうにせなければならぬと。如  
何にも尤もの説のやうである。が、わたしは色んな意味で此の人の説

には賛成が出来ない。其の譯を今一つの譬を設けて説いて見よう。

——茲に一軒の家があるとする。建てられてからも大分長い年月  
を経たので、壁は落ち、簷は傾き、根太なども方々抜けてゐる。度々  
少しづつ、の修繕を加へて来たが、今はもう、少しばかり手を入れた位  
では間に合はなくなつて来た。所で、其の傍に、別に建てかけて半ば  
以上出来た家が一軒ある。それは新らしく建てられたいけあつて、其  
の構造も、其の裝飾も、すべて當世風で至極便利に出来てゐる。けれ  
ども、まだ本當に仕上つたのではないから、もし高貴の人でも来られ  
た場合には、直ぐに通し兼ねるといふ缺點がある。のみならず、今の  
所、まだ方々から中が見え透いて、何となく端近だといふ難がある。

——そこで或る人がかう言つたとする。なるほど、古い家は見た所

當世風でないし、それに風が吹き込んだり、雨が漏つたり、何うかすると、直きにも倒れて了ひさうに見えたりしてゐるが、此の家では兎に角祖先以來さまざまの慶事も行はれたし、弔ひ事も修められたししたのであるから、何うも此の儘立ち腐れにするのは情に於いて忍びない。何のやうになり修繕を加へて、これから先きも長く一軒の家として住むやうにしたいものである。新しい家もいゝが、新しいだけに雅致といふものがない。それに歴史がなく古びがないから、従つてまた重みがついてゐないといふ缺點がある。それよりはよしんば大修繕を加へる必要があるとしても、矢張り古い家の方がよいと。

一應はわたしも尤もであると思ふけれども、古い家は、此處で大修繕を加へた所が、要するにそれは姑息の手段で、先きが見えてゐる。

やがて大風でも吹けば忽ち倒れて了ふものと思はねばならぬ。それを情に於いて忍びぬといふやうなことを言つて、何時までもこたはつてゐるのは詰らぬことではないか。それよりは寧ろ新しい家を出來るだけ早く完成させて、其れに移り住むやうに心懸けた方がよいではないか。同じ手を入れるにしても、これから日に日に壞れて行かうとする家を修繕するよりは、新らしい家を竣成させる爲めに努力した方が幾ら意義のあることか知れない。少くとも壞れ果てようとするものを何うかして支へようと努力するよりも、新らしいものを作り上げようと努力する方が幾ら張合があるか知れない。

書翰に於ける候文と口語文との關係に於いても、わたしはこれと同様のことが云へると思つてゐる。候文はよし人が何と云つてこれを



支へようとしても、もはや壊滅の連に向つてゐることは争ふことが出  
來ない。單に其の文體が、どんな變遷を経て來たものであるか、何う  
いふ典例、何ういふ用語を有するかといふやうなことを研究するに止  
めるならば構つたことではないが、それより一步進んで、實用文として  
の書翰文を候文で書き習はうとするのは時勢に伴はぬ無用な努力であ  
ると思ふ。

繰返していふが、今日只今の言葉を用ゐるに、今日只今の思想や感  
情を述べることが出来ると思ふのは、すでに型に囚はれてゐる人の迷  
妄に過ぎない。因襲に従つて出來た文章の中から、名文や生きた文章  
やを見出さうとするのは、それこそ木に縁つて魚を求めるやうなもの  
である。

文例に囚はれるな

一體日本には昔から悪い習慣がある。物事を何でも一つの型に當て  
嵌めて、それに依つて禮に合つてゐるか、禮を缺いてゐるかを決さう  
とする。書翰なども久しくさういふ慣例の下に支配されて、徳川時代、  
即ち我々の父祖の時代などには、『何々消息往來』といふやうな一冊の  
書物さへ座右に備へて置けば、何んな用事が起つても、直きに辨する  
ことが出來たさうだ。例へば暑中見舞を何處かへ出さうとすると、座  
右の本を繰つて、其の例を搜し出す。其處に何と書かれてあるかと思  
ふと、

不怪大暑御座候之處彌御清福可被成御波奉珍重候依而水團一

鉢供高覽候寔以暑中御尋問之驗而已御座候 不具

と、かう書いてある。すると、其の見舞状を送る相手がどういふ人であらうが、そんなことには一向頓着しない。何でも構はず其の通りを書き寫して送る。中には文中にある水團一鉢なるものを添へずに只だ書翰だけ持たしてやつて、平氣で澄ましてゐるやうな滑稽も演せられたさうだ。しかも、それを何人も怪まないのみならず、此の種の文例に依つて書かれたものを、最も法に合つた書翰として、受取つた方は殊に満足したものだと言ふ。嘘のやうな話であるが、本當だつたさうだ。

所が、これは必ずしも徳川時代にばかり止まらない。明治になつてからも、否、大正の今日に於いてもなほ或る部分では依然として所謂

文例なるものに支配されてゐる。而かも此の文例同様の手紙は、一般に大抵の手紙が喜びを興へるものであるに反して、やゝもすれば不愉快な氣分さへ喚起させることがある。何故であらうか？

一體文例といふものは、かういふ場合にはかうといふ一つの形式を示したに止まつてゐて、如何なる場合にもそれを無差別に當て嵌めることの出来るものではない。なせなら、先きにも述べたやうに、書翰文は相手次第で其の言葉つきが自然と異つて來べきものである。然るに文例は、其の當然の約束として、ある一つの場合にのみ適用されるもので、其の他の場合には適用されないからである。従つて、書翰に最も大切な、直ちに先方の人の胸に觸れて、其の人を動かすといふ眞情はこれを缺く場合の方が多い。面白くない筈ではないか。

それなら文例といふものは全く無用の長物であるか。わたしは決してさうとは思はない。なせかといふに、初めて書翰文を習はうとする人達に取つては、書翰文といふものがそもく何ういふ風のものであるかといふことからして分つてゐない。さういふ人達には、是非共一種の文例を示して其の體裁を示す必要があるからである。即ち人を誘ふ文は、かういふ風に書かねばならぬとか、祝賀の文はかういふ言葉遣ひをせねばならぬとか、見舞の文はどう、報知の文はかうと、一々これを會得させねばならぬ。丁度、我々が少年時代に、餘所の家の祝儀不祝儀に行かせられた時に、其の挨拶のしかたを親達から詳しく教へられたやうなものである。それでないと、どんなへまなことを仕出かさうも知れない。それについて今思ひ出した一つの話がある。それ

はわたしの祖父の時代のことだとして、わたしが子供の時分に祖母から話されたことであるが、村のある家の若旦那が、近所の家の七夜の祝ひに招待されて行つた時に、どうした機みであつたか、うつかり口を迂らして、『お七日でお目出度うございます』と言つたのださうだ。お七日といふのは人の死んだ初七日のことである。言つて了つてからはツと自分で氣が付いたが、其の時はもう胸が一ぱいになつて、先方がそれをどう取つたか、そんなことは考へて見ようともせず、あわたいしく席を立つて、其の儘急いで家に歸つて、青くなつて納戸に入つたぎり十幾日の間一步も外へ出なかつたといふことだ。

これは必ずしも茲に擧ぐべき適切な例ではない。けれども、ふとした過ちからどんな失態を演じないとも限らぬといふ戒めにはならう。

さういふことのない爲めに、先づ文例に依つて、具體的に一と通り書翰の體を覚えて置く必要はある。併し茲に注意すべきは、實際の用事を辨するに當つて、いつでも其の文例を書き寫しさへすればそれで用が足りると思ひ込んでならぬといふのである。繰返していふが、文例は文例としてのみ値打があるのである。それを其の儘自分の書翰にした所で、自分の生きた感情が籠りやう筈がない。丁度習字の手本が手本としてのみ値打があつて、それを敷寫しにした所で、其の人の筆蹟とならぬと同じことである。だから、一度文例に依つて其の體裁を覚えてからは、全く自分の頭の中にあることを其の儘に書いて、そして先方の人に知らせる稽古をしなければいけない。もし、さうでなくて、いつまでも文例を後生大事に守つてゐると、終には自分の思つ

てゐることが書けなくなつて了ふ。即ち自分自身の書翰なり文章なりを書くことが出来なくなつて了ふ。尤もわたしがこの書物に集めたものは悉く生きた書翰文であつて、所謂文例のやうな型にはまつた死んだものではない。けれども、其の儘書き寫していけないことは前に述べた所と同じである。

作例百五拾通

一 避暑には適当な地

御手紙拜見いたしました。私達の村は、たしかに避暑には適して居りますが、その避暑の人達を満足させるほどの設備が十分でないのが遺憾であります。今來てゐる人達は明いてゐる別荘を借りたり、素人屋の座敷を借りたり、でなければ旅舎の二階に居ります。尤も旅舎と言つても村に三四軒(良いのは一二軒)ほどしかありません。却つて素人屋を捜すとよい所もあります。

今日、先生の御一家のお出ると云ふ様なところを捜しました。それは村のお寺であります。涼しい森の中の寺であります。暑さを知らずに暮らせる様なところですよ。座敷が四つあります。清水も湧いて居ま

す。前に大學生が来て居たこともありました。そこは住持が御用立てしてもよろしい様に言つて居ります。

そこでは自炊して頂きたい様に言つて居ます。勝手元や勝手道具はお貸しするさうですが、蒲團や蚊帳は寺にはないさうですから、先生が持つてお出でても、またそばから借りてもよいと思ひます。家賃は定つては居りませんが、五圓以上は取りますまい。涼しくて閑静であります。都の人々の口に合ふ様な食べものが自由を得られません。

外にも素人屋で六疊間二間つゞきぐらゐの部屋を貸すところもありますが、御多勢なら狭いかと思ひます。

その寺の方は涼風の家のあるところで、富士見驛から一里あります。

素人屋の方は烟浪の村で驛から十五町ほどあります。

涼風は今養蠶でここ一週間ばかりは大多忙であります。烟浪は養蠶をやらないので家に居ります。もし先生におひまがありましたなら實地検分がてら御來遊下さいませんか。

涼風の所は字を御射山神戸と言つて青柳の驛の方に近く、烟浪の所は原の茶屋といふ富士の見える所であります。

お目にかゝつてお話しが致したうございます。

七月廿七日。

(大正四年の七月、わたしは數年前から取り懸つてゐたゴンクウルの翻譯を完成しやうとして、暑を避けて甲州の臺ヶ原へ行つた。其

處は信州境に近い駒ヶ嶽の麓で、わたしに取つては第二の故郷ともいふべき懐しい思ひ出の多い所である。わたしは其處で、自分の實家同様に心安く起臥することの出来る友達の家客となつて日を送つてゐたが、出来ることなら家族の者をもみんな呼び寄せて、この暑い夏を一緒に山の中で涼しく暮らさうと前から思つてゐた。所が臺ヶ原にはそれに適當した家が一軒も見付からなかつた。わたしはひどく當惑した。其の折柄、國境向うの信州の富士見から書を寄せて遊びに来るやうにと連名で勧めて來た未見の二人の青年があつた。それは小林涼風、名取烟浪の兩君である。わたしは渡りに船の思ひをしながら、この兩君に向つて一家の者が一と夏を暮らせるやうな家の有無を聞合せて。其の返事が、即ち、此處に掲げたものである。

二 聊か肌寒い感じが

先生。お仕事はお進みになりますか。そしてお變りはございませんか。水にも風にも。

お立ちになつてからちよいとあたづねはして居りますが、去年しばらくその二階を借りてゐた馬喰町の親戚といふ家の主人が四五日前から病が急に重つて、(肋膜でもう大分長くねてゐたのです。)たうとう昨日の朝なくなりましたので、亡くなる前から、やれもう今夜があぶないの、急に様子が變つたのと言つてその度に呼び出されてゐましたので、何のお役に立つ事も出来ず、心濟まない思ひをして居ります。しかし奥様初め、雄さんも乃生ちゃんも至極お元氣ですからその儀は



御心配なさいませぬやう。そして御宅の方も大部分お片づけになつた様子です。私も今夜お通夜にもう一晚つぶされて、明日の葬式を送れば、初七日迄はその方は放免されますから、少し位のお手傳には上れるつもりで居ります。

窪田さんへは先生のお立ちになつた翌々日かに『旅人』と『罪と罰』とをお届けして置きました。

東京もここ、二三日少ししのぎようございます。殊に今朝は單衣一枚では聊か肌寒い感じがいたす位でございます。

先生がお立ちになつた翌日、又元山から手紙を寄越しまして、お前のして居る事はどう考へても末の見込みが立たぬから、見込みの立たぬ當てにならぬものをあてにして此方をしまつて出ていく事は出来な

いから、此方へ来いなんて言つて来ました。ちやんと話をつけて再来年は出て来る事に納得して置きながら、又ぞろこんな事を言つて来るんだから實に困ります。一言ではねつければそれ迄ですが、さうしないで、なるべく穩便にと思ふ爲に、いろ／＼考へましたが、結局此方に口があつてその方へ入つたから、大丈夫だから、そちらから出て来てくれと言つてやらうと思つて居ます。さう言つて了へば、無論もう金をとるといふ事は一寸言出しにくい事になります。でこの因果を京にもよく言合せて、どんなに苦しい思ひをしても此方でやつて行く事に決心しました。こんな事をお耳に入れては、折角世をはなれて仕事に専念にならうと思つて居らつしやる先生の今の境涯に石を投ずる様なものになりはしまいかと思ひましたが、誰にも聞いて頂く人がない

ので、つい書いて了みました。いづれお歸りになつた上で委しい事は聞いて頂きたいと思つて居ます。

いろ／＼なごた／＼の爲に長谷川さんへはまだ参り兼て居ります。近中におたづねするつもりです。

終りにぞみ、先生の御身にいつもの水あたりなどのない事を切に祈ります。そしてお仕事の進みます事を。

末筆ながら京よりもくれ／＼もよろしくと申出候。

七月二十八日

白葉生

(臺ヶ原に着いてから一週間ばかり経つた。わたしは適當な家のないのに當惑すると同時に、東京に残しておいた妻子の事をも少から

ず氣にかけてゐた。この手紙は、さういふ最中に受取つたものゝ一つである。其の當時、白葉君に色々とお世話になつた事が、この手紙を読むと今もなほ思ひ返される。それに白葉君の苦しい心持も、自分の道を進まうとする若い人の心的過程の一つとして鮮かな色帯びて蘇つて来る。

三 何となく秋らしく

甲州の駒ヶ岳や、八ヶ岳や、白須の松原や、釜無川や、七里岩や、皆な兄の日常接して居られる光景であるかと思へば羨ましさの限りに思ひます。仕事はすん／＼出来て行くことでせう。皆さんが一所に行かれたのですか、兄一人ですか、新聞では御一家一所に行かれたやう

に書いてあつたが、いかゞですか。清い空気だけでも頭が澄み渡るこ  
とでせう。日野春の停車場は僕が一番好きな所です。いかゞ御暮しで  
すか。——先日『氷島の漁夫』だけは博文館の有田氏に渡し今『埃及行』  
を専心やつて居ます。金も前の分だけはもらひました。もう何となく  
暑い中にも秋らしくなりました。

(八月の中旬、吉江孤雁君から寄せられたものである。葉書の裏面  
にこれだけのことが書いてあつて、お互ひの名前は表面にだけ記さ  
れてゐた。『氷島の漁夫』も『埃及行』も、共に『西洋文藝叢書』の一編  
として發行されたピエル・ロチの翻譯である。)

#### 四 無言がちの朝夕を

暑中お變りも御座いませんでしたか。ずるぶん暫く御目にかゝらな  
いやうな氣が致します。今年はこちらも随分暑うございましたが、こ  
の五六日急に秋めいてまゐりました。此頃は力強いさびしさのうちに  
無言がちの朝夕を送つて居ます。

(越後の糸魚川へ歸つてゐられた相馬御風君から東京の家の方へ寄  
せられたもので、發信の日附は八月二十二日であつた。親不知の險  
を寫した繪はがきで、打ち寄せる日本海の波濤をも微かに想像する  
ことが出来た。)

五 山國の初秋も

一昨日社で白葉君に逢つてお所が始めてわかりました。僧房生活も日光とはいくらか事變つてゐるでせう。ことに御家族御同伴だと承れば、なか／＼にお賑やかでせう。

山國の初秋もそろ／＼雨や風に變つた感じを持たせつゝ近づく事と思ひます。

私のゐる海岸は此頃雨ばかり降つて居ります。やかましい蟬や蝸の中で、今、雨にぬれた珊瑚樹の生牆をAdmireしながら此ハガキを書きました。先刻田山さんの紫鉛筆のハガキを受取りました。十月號のワセダへ『貞操』といふ小説を書いて下さるとの承諾書です。貴兄も早

く翻譯の仕事を切上げて、何か雑誌の方へ書いて下さい。信濃は何となくなつかしい國です。その國の名をきけば僕はいつも窪田君の歌を思ひ出します。――鉦たゞき信濃の國を行き行かばありしなからの母ますらんか。

(鶴見在の生麥にゐる中村星湖君から、信州富士見の瑞雲寺の方へ寄せられたはがきである。發信の日附は八月二十三日。武藏の海岸と信濃の高原と一葉のはがきにも初秋の感じが乗せられてゐる。)

六 例の持病の脚氣起り

御無沙汰いたしました。今月の始めから例の持病の脚氣起り、それ

に重く来たので、それから丸で一月ぐづくして暮して了ひました。今年ほど困つたことは御座いませんでした。一度お手紙さし上げるつもりなりしも、それやこれやにて御無沙汰いたしました。富士見は何うです？ 勉強が出来ますか、成たけ早く御完成のほど祈り上げます。来月になつたら、何處かに轉地でもしやうかとおもひますが、それも何うなることやらわかりません。

二十七日

田山生

前田君

今月は東京も涼しく、避暑に行きたいとおもひませんが、位でしたから、山はすゝしすぎはしませんでしたか。夫人にもよろしく。

(田山さんは原稿を書くのに、ずっと以前は細い眞書きを使はれたが、後にはみんな鉛筆にした。この手紙も亦た鉛筆で書かれてあつた。原稿紙の上に青鉛筆で。そして追て書きは前の方の欄外の餘白に小さく書き添へられてあつた。)

## 七 暮れて行く湖の上

虫が鳴いて居ます。私の心も泣いて居ます。淋しい晩で御座います。先生。もろこしのはするゝ音をなつかしみながらこの手紙を書いてゐる私をお思ひ出し下さい。

先生。私は馬鹿です。馬鹿のばかの大ばか三太郎！

先生がいまして下すつたら、あれもこれもとひそかに期待して居り

ました事を一つもお聞きしないでおわかれしてしまひました。文學思想のとぼしい私には、どうしてもお聞きするだけの勇氣が御座いませんでした。

あの晩、思出多きあの晩。先生を御送りして妙に淋しくなつた心をいだいて机の前に坐つた時、ふところからスルリとぬけ落ちた手帳を拾ひ上げてよんで見ましたら、丁度尋常一年生の綴方のやうな物が書いてありました。うす暗い舟の中で目を手帳へおしつけてかいたものがこんなものであつたのでがつかりしてしまひました。

ちりめん紙のやうな波の上をスー／＼と氣持よく舟が這つて行く。〇〇さんが煙草のすひがらをパツとなげた。シューツと音がしてもえがらが流れ去る。

じいつとそれを見つめた私の心は妙に冷たくなつた。

天地はまつたく暮れた。湖の水がまつくろに變つて私の心は暗黒な土の世界へひつばられて行く。

ヒタ／＼と舟べりをた／＼と波の音が私の胸に共鳴して泣き度くなる。コーモリが一匹ツーツと舟の上をかすめた。波の上を一晚中なき歩くつてHさんが言つた。何が鳴き度いんだらう。

やつぱり私のやうに、わけもなく淋しがつてないてるんじやないだらうか。

ふつとこんな事が考へ出されてしきりにコーモリの心を知りたかつた。

先生、これだけで御座います。私は先生についての感想がちつとも

かけて居なかつたのでものたりなくて一人自分の貧弱な心を笑つて居ました。もう少し時間が長かつたら——こんな事も思つて見ました。けれどもあの晩の事は、永遠につきざる思出となつて私の心に残るで御座いませう。

先づもどうぞ諏訪の湖を思ひ出される時、あの夜の私共を思ひ出して下さいまし。これでやめます。御身御自重を……………

大正四年八月廿七日夜。

(八月の下旬、わたしは富士見の三人の青年と共に上諏訪へ遊びに行つた。そして其處で更にまた三人の娘さんに紹介された。みんな文學好きの人達である。一行は一隻の小舟に乗つて諏訪湖を半ば廻

つた。やがて日は暮れかけて、水の上も次第に暗くなつて來た。わたし達は舟を捨ててから、再び小さな温泉宿の高い三階にのぼつて、其處で食事を共にしながら、一夕を歡談に費した。この手紙は其の時の娘さんの一人から寄せられたものである。)

### 八 やつと明日退院

御見舞難有存じ候。やつと明日退院致すことに相成り候間他事ながら御安心を願上候。

御上京の時は何時頃によ。いづれ拜眉の上。九月七日。

(新聞の文藝消息で、吉井勇氏が鎌倉病院へ入院したことを知つた。

遠く離れて居れば、ふとした事も氣にかゝるが慣ひである。不取敢見舞狀を出して見た。これは其の返事である。由井ヶ濱の、いかにも夏らしい繪はがきの表に簡単にこれだけの事が書いてあつた。

九 勇健な野蠻人になつて

普及會叢書の原稿に追はれてお返事がおくれました。ゴングールの日記結構でせう。どうぞ十日前にお寄せ下さい。創作の氣分はまだ動きさうにありませんか。お忙しい所へこんなハガキが飛込むのも悪い刺戟か知れませんが、『陥穽』はドシムゝ進めて、あとで校正の時にもユツクリお直しになつてはいかゞです。

兎に角勇健な野蠻人になつて山の中から出て來られることを望みま

す。白葉君入營のよし。

(ゴングールの日記の譯を『早稻田文學』に載せて貰へるだらうかと中村星湖君の許へ聞き合せて見た。これは其の返事である。併し、わたしに取つてこの手紙の忘れられないのは、勇健な野蠻人になつて山の中から出て來るやうにと言はれた、其の言葉の方である。わたしは其の時、本當にさうしたいとしみじみ思つた。)

十 昨日から氷川様のお祭

金富町の家のないといふ事が、何れ位小生をして寂しからせてゐるか分らず候。仕方のない事ながら、いやな事に候。お仕事の進行



を祈り候。手傳のしやうもない事に候へども、本當にしたく思ひ候。例の後氣性として、手も附かず候へども、これが創作と申すではなし、外に爲事のない譯にも候はねば、極度の潔癖は御遠慮あるやうにと御すゝめ致し候。

その後殆ど誰とも交通のない閉居生活を致しをり候。先月十八日より廿五日へかけて、富士の裾野めぐりを致し候。例の谷君とにて、前々よりの約束を履行したる次第に候。甲州の大月から、河口、西、精進湖を見て一泊、本栖より青木ヶ原を経て鳴澤へまゐり、急に富士登山を企てて大失敗、命からかくにて夜の十一時半舟津の宿へつき候。それから御殿場へ出て泊り、乙女峠を越えて箱根へまゐり三泊致し候。甲州と申す處の地氣と人とを、極めてよく知り申候。

國へ行つてをりし章公は、先月二十六日旭彦さんと上京、旭彦さんは翌日大阪へ發。赤兒は、何うも腹の工合思はしからず、發育宜しからず候へども、病氣と申す程にはあらず候。細君も、まあ〜と申す状態にて暮しをり候。

松村は子供をなくし候。小生の旅へ出る前に候。しよげてをり候。その爲め雑誌の雜務を内藤君にしてもらひ候。此の人とはとにかく本屋に候へば、一つには同君の店の景氣として發賣をたのみ、その交換として賣りひろめをしてもらふ約束に候。つぶす譯にまゐらず候間、何等かの意味にて、誰かに利用してもらへば澤山なりとの心持より候。

同時に、雑誌の方針も、金はなし、さう用を足してあるくヒマな者

もなし、かたぐく苦しさが過ぎ候間、暫くの間陣をひき候て、歌の雑誌として行きたくと決心致し候。本意にはあらず候へども、小生としてさし向きさうするより外仕方なきやうに思はれ候。微力を（物質的にも精神的にも）嘆じ候。

歌の雑誌とする事は、それ相應の發展をするには却つて容易に思はれ候。さうした機運も、此頃になりて自然に附き來りし觀もあり候。今一步土臺のたしかさを得てその上にてと思ひをり候。

昨日から氷川様のお祭に候。秋晴の空に、太鼓の音きこえ、せはしさうな蟬の聲きこえをり候。氣ちがひ雨がをりくやつてまゐりて空氣はねばこく候。

用を取纏めたしと申す念しきりに致し候。同時に、健康のさうすぐ

れをらざるをも感じ候。空想的でなく物を思はせられる年齢が來てしまひ候。

細君に宜しく、山居の恰好、小生には繪として想像致され候。

九月八日

空 穂

前 田 兄

（金富町の家といふのはわたしの舊宅である。近くに住へば滅多に手紙を書くことのない友達同士も、暫く遠くに離れてゐれば、それからそれへと書かすには居られぬ事が陸續と起つて來る。どんな小さな事でもお互ひに知り盡してゐなければ安心が出來ないからである。この手紙は、さういふ意味に於いてわたしには殊に懐しい。）

十一 日本最大の弱點

拜啓。小生出立の際には御見送下されありがたく存じます。七月二十  
 六日桑港着、博覽會の美術館ではフランスの隣に日本のが並んでゐま  
 す。ロダンやセザンヌの出品の隣りに、吉田博君や石川寅治君の出品  
 が並んで居ます。八月一日ロスアンゼルスへ着、半熱帯の氣候で、椰  
 子やシヤポテンが多く、花卉や果實は翻れるほど溢れてゐます。日本  
 の最大弱點は食料の貧弱なこととせう。當地で數も多く安いのは食料  
 です。

九月九日

小島久太

(小島水氏がロスアンゼルスに在る横濱正金銀行の支店長として  
 赴任するのを横濱の埠頭に送つた後で、わたしは吉江孤雁、野尻抱  
 影の兩君と共に、磯萍水君に案内されて本牧の三溪園の方へ遊びに  
 行つた。そして其の晩は南太田町の磯君の家で風呂を浴びたり、晩  
 餐の御馳走になつたり、おぼけ話を聞いたりして、だいぶ夜を更か  
 した。其の記憶がまだ鮮かなうちに、小島君は遠く太平洋の彼岸に  
 渡り、わたしは信州の山の中に籠る身となつてゐた。)

十二 病院の窓から

御無沙汰いたしました。御無沙汰いたしました。黒い大きな冷たい魔物の手につかまれて、私は青い建物の一つの室

になげ込まれて居ました。が、やつと死といふものをのがれて近い中に家へ歸ることが出来ます。

もう先生には御歸りになることゝ存じます。それまでには、是非御伺ひいたすつもりであります。

病院の窓からの秋の眺めと蟲の聲は淋しくあります。

富士見病院にて 名 取

（上諏訪へ一諸に遊びに行つた青年の一人は、俄かに病氣に罹つて、暫く富士見驛の傍の高い所にある病院に入院してゐた。これは、退院間際になつて、其の病院の全景を寫した繪はがきの表に書いて寄せられたものである。）

十三 芋あり明月あり

十七日出之御書面唯今拜見致候。小生先月岡山縣へ出遊、去る十日

三日歸京して不在中の事務整理中、本日は小石川の金剛寺と云ふ君の居所の直ぐ下通りへ布教に出向くから歸途に君の宅へ訪問せんものと思ひ居たる所へ君の手紙着して好都合なりき。來辭に依れば、本月の二十九日か卅日頃に上京の趣、誠に結構なり。今から指折り數へて待つて居ます。僕は來月五日に東京を出發して長崎縣の口ノ津邊即ち南の近所に用向ありて該地へ赴く豫定に候。歸京は十月二十五日頃と相成べく候。勿論彼地にて南君をも訪問する心組なれど到底一日の閑は得難からん。偕てかゝる次第故、君の拙寺へ來らるゝは大に歓迎す

る處なり。小生の不在中、男氣としては十歳のと當歳のとなれど、無用心故、君大に奮發して一ヶ月間留守の任を盡されては如何。兎も角も面會してから談じ付ける下心なり。先づ上京したら根據地として拙宅へ來られよ。

芋あり明月あり村酒野肴以て君を遇するに足る。細君も同時に來たまへ。敢て遠慮はイラヌ事也。水澄みて空氣清し。兒童の健康に適す。マア熱心にス、メて見たまへ。其處の住職が小生を御存じとならば宜敷申傳へて呉れ給へ。草々。

(山居二ヶ月餘、世は既に秋になつて、殊に高原の朝夕は涼しさがやゝ過ぎて來た。やがて東京に歸らうと思ふ。併し、仕事はまだ片

附いてゐない。なほ暫くは何處か閑靜な所に引き籠つて専心それに従事しやうと思ふ。そこで東京の郊外の或る禪寺の友達の許へ暫く寄寓させて呉れるやうにと頼んで見た。これは其の時の返事である)

### 十四 立つ前には是非

御無沙汰しました。皆さん御變りありませんか。小生は十月四日に立ちます。立つ前には是非御目にかゝりたいと思つてゐます。御ハガキの様子では大抵御目にかゝれさうに思ひます。萬事は拜眉の上にて。

(ロシアへ留學する事になつてゐた片上伸君の許へ出發の日取を聞き合せた返事である。)

十五 幾日頃歸京の事に

其後は御機嫌よく、また昔に返つてお忙しくお暮らしの事であらうと存じて居ります。餘り急なお知らせで、一寸驚きました。ほんとうよろしうございました。何だか心が軽くなりました。おはがきによりますと、家をまた一時假り越をして置いてゆるく捜すやうにとの事でございますけれど、私はもう、引越といふものは一生にも爲たくありません。私は七月家を片附ける時にも、只一人で茶碗や皿を一つづつ紙に包んで、ぼつ／＼とかたづけ乍ら、もう幾度こんな事を繰返したらうと思ひました。そしてもう二度と再び引越しなんぞ爲るものではないと、しみ／＼思つたのでした。

只今はどちらにお出ですか。神谷町でせうか。私はあの葉書をさし上げた翌日、於會へ行つて一晩泊りまして、其の翌日の十日に今井へ来ました。二晩泊り位の積りでしたけれど、叔父や叔母がどうしても歸しません。十五、十六日が鎮守のお祭で、学校の運動會もあるし、十七日は甲府の市制祭だから是非それを見て歸れと申します。叔父たちは私をまるで昔と同じ小さな子供だと思つて居るやうです。この家で、何より先きに私を幼い昔に呼び戻して呉れたものは、私が生れるから聞き馴れてゐた堀抜井戸の水の音です。朝から晩まで、照つても降つても、年が年中澄み切つた水がふつ／＼と湧き出して、溢れて、こぼれてゐます。その水を受ける十坪ばかりの堀には、鯉が、時には重なり合つて水の上に押し上げられる程も居ります。その湧き

立つ水でお茶碗でもお鍋でも洗ふのですから、私はほんとに心持がよくつて、嬉しくつて堪りません。私はたとへ不味い食物でも、たい堀抜の溢れ出す水で洗つたものだと云ふ事ばかりで、海山の珍味より甘味しく、喜んで食べて居ります。

叔父は毎日、腰に印籠を下げて、村の事で忙しくそちこち歩き廻つて居ります。十六と十二と十の男の子は、同じやうな五分刈り頭を並べて、學校から歸ると直ぐ、雄司や乃生子をやい〜と云つて遊ばせて呉れます。それで二人とも大喜びで遊んで居ります。

私どもの部屋にしてあるお蔵の、肱掛窓から眺めますと、遠い果てに青い山が丸くかこんであるその幾里の間に、一軒の家も見えませんが、只黄色い田と青い空ばかりで、その黄色い田の半ば頃にこんもりと帯

のやうに長く續いた森は、水害前の笛吹川——今の平等川の兩岸の竹やぶです。遠くにかすかに見える八ヶ岳や駒ヶ岳にも、幼い頃が思ひ出されて懐しいのですけれど、すつかり日が暮れてしまふと、右手によつて、稻の穂の上に低く、遙に甲府の町のあかりがちら〜と見えるのがなほ懐しうございます。

もう富士に初雪が降りました。昨日までは黒い色をして只の山のやうに見えた富士が、今朝起きて堀抜で顔を洗ひ乍らふと見ますと、眞白くなつてゐました。如何にも珍らしいものを見付けたやうに、私は嬉しくつて堪りませんでした。

雄司達は叔母について畑へでも行つたのか、今家には私一人ぎりになりました。庭の隅つこで虫を啄いてゐる鶏が、晴れ切つた空にむい

て長く引ばつて啼きました。何處かで單調な、ゆるい音をさせ乍ら米を搗いてゐます。何といふ静けさでせう。自分の身體をめぐつて流れる血の音が、自分にはつきりと聞えるやうな氣がします。何といふ平和な落付いた日が続くでせう。今私の心は、幼い昔にきり覚えてゐないやうな安らかな幸福で、一杯になつてゐます。どうぞあなたも喜んで下さいまし。

十七日には甲府迄叔父さんに送つて頂いて、それからちかには八幡へ歸る筈、八幡へ歸つたらまた直ぐに東京の方へ歸りたいと存じます。幾日頃に歸京の事にいたしましたせうか。そちらの御都合次第で日をおきめになつて、速に御返事をいたゞきたうございます。子供達もほんとは元氣でございます。どうぞ御安心なすつて下さいまし。では御機嫌

よう。

十月十四日

(閑静な友達の寺で、今暫くの間翻譯の仕事が続けるつもりで、わたしは十月一日といふに、妻子達を國許に残して置いたまま、先づ一人だけで東京へ歸つて來た。そして郊外の其の寺へ鞆などを持ち込んだ。所が其處には、ある新聞社の一つの椅子がわたしを待つてゐた。わたしは其の翌日推薦しやうとしてゐる其の社の編輯長に會つていろ／＼と様子を聞いた。わたしには全く経験のない其の仕事が不安のやうでもあれはまた興味でもあつた。わたしは二日間の猶豫を乞うて熟考することにした。そしていよいよ入社することにな



つたのは四日であつた。其の日わたしは銀座の其の社へ行つて社長に會つた足で、片上君のロシアへ立つのを東京驛に見送つた。——これはそれから五六日の後、入社したことを知らせてやつた返事として、國許の親戚にゐた妻から寄越したものである。

## 十六 何といふ淋しい思出

秋雨が淋しく降り注いでゐます。

私は今寺の玄關の突き當りの部屋にゐます。かうして一人静かに机に向つてゐると、心は何時かしら書物を離れて、黄孫樹に降り注いでゐる雨の音の方へ連れて行かれます。時折バシリ／＼と落ちてゐる小枝を踏み折つて誰かが庭を通る音がします。私は其度に涼風君か知ら

——と思つて、一きは耳を澄まして見たりしました。そして矢張り涼風君ではなかつたと知れて、軽い失望を感じました。

先生とお別れしてからは、只何といふこともなしに淋しくて堪らないうやうな氣がします。愈々今日がお別れといふ日、今机を置いてある室で茶を飲み乍ら森永のキャラメルを食べましたつけ。それが今では唯一の思出の種になつてゐます。紙を尻に結び付けられた蜻蛉が、繊弱い羽根に辛くも身體を支へ乍ら室の中を高く低く舞つてゐる態が、眼に見えるぢやありませんか。何といふ淋しい思出でせう。私はボンヤリ紙で張りつこをしたランプを噴め乍ら、懐かしい追想に耽つてゐます。

最前私が此所へ來たばかりの時でした。一人淋しいまゝに洋燈を捧

げてあの書齋に使つた座敷へ行つて見ました。綺麗に片付けられた座敷は只がらんとして、一脚のちやぶ臺が主人顔に真中に据つてゐました。悲しいやうな懐かしい思ひ出は其所にも一抔でした。私は洋燈を捧げたまゝ暫く其所に立つて居ました。襦袢を着た先生が厚い原書や参考書の中に坐つてゐるのが、私の眼から去りませんでした。時時軒先の杉の梢から振ひ落す雫がポタ／＼と、地べたに落ちる音がしました。

私は又更に翻つて、私の爲に貴重な時間をむざむざ浪費させられた先生の心の内の苦みを思つて見ました。——許して下さい——私の心は今鋭くかう叫んでゐます。幾分なれ實生活の味を知つて來た私の良心は先生のおいでの時から既にそれを深く氣にしてゐました。そして

先生と相對してゐる間も、先生の顔色からそれを讀み取らうとする心が鋭く働いてゐました。——お別れしてからは殊にそんな事が私の心を暗くさせます。東京へ行けば何時でもお目にかゝれるとは思ひ乍ら、何だか遠い別れのやうに思はれてなりません。

書いてゐる間に、書いてゐることに惹き付けられてか、私の心は何時になく感傷的になつて來たのを感じて來ました。かうして凝乎と淋しい雨の音の中に浸つてゐると、私の眼の前を先生の顔や奥さんの顔や坊ちゃん顔などが、映し繪のやうに通つて行きます。

庫裏の方も今夜は妙にひっそりしてゐます。物凄程の静寂が私一人を取巻いて、只庭の樹の葉にザアザア降り注いでゐる雨の音丈が、單調に私の聽覺を遠くから軽く揺つてゐます。

涼風君はまだ見えません。

(富士見にゐた時、いろく世話をして呉れた三人の青年の中の一  
番年長者である小林草村君から、別れた所の思ひ出を書いて寄せら  
れたのが、この書翰である。之を讀むと、わたし自身か其處にゐた  
時の生活が目の前にありくと展開されて来るのを覚える。思ひ出  
はいつも懐しいものであるが、殊に、淋しく暮らした時の思ひ出は  
一入忘れ難いものである。ただこの文章は、わたしに宛てたもので  
はあるが、ある雑誌の上で公開したものであるせゐか、何處か固く  
なつたやうな餘所行きな所もあるやうだ。)

十七 お噂申すが無上の樂み

拜啓。先頃は御細々との御手紙、又此度は御葉書頂戴、此外御令閨  
様より母へ御懇なる屢々の御書面、一々難有拜受致候。父の病氣  
特に御配慮給はり、之亦難有事に存申候。疾に御通信可申なりし  
が御住所定まりての上と存じ、殊に小生は去る十二日父を連れて信州  
松本在山邊温泉和泉屋へ参り、小生と引換へに母は昨日又同所へ参り  
候次第、何やかやにて御無音の段々、思召給ひしかと恐縮  
致居候。父の神経痛も其後注射の爲めか、大ぶ宜敷回に相成、あと  
は湯治で仕上げんかと山邊へ同道致候次第、必ず御心配被下間敷候  
切、先頃中は折角喜んで御越し被下候に、誠に何の風情も無之、

殊に病人なぞ有之候爲め自然御待遇に心専らならず、何もかも御無禮勝ちにて嘸かし御令閨には御驚き召し候はんと恐縮致居候。去りながら母や家内や子供等が親しく御兩所に御目に掛かつて御懇意相結び候は何よりの事なりしと存居候。雄さんのぶさんは不相變御機嫌に候や。無邪氣なるあの顔、難忘候。内の子供は能く皆さんの事思出し、御飯時なぞ一族打寄りては御噂申すが無上の樂しみに候。貴兄には能く新聞社の方へ入京早々御入社の際、誠に結構の事に候。何でも御體丈夫で益々御奮勵を祈居候。其後糸況愈々騰貴、昨年の打撃も取返して尙ほ餘りあるかと存じ候。何卒御喜び被下度候。今度東京へ参りましたら何所かへ御供致しませうかね。何れ母よりも手紙差上可申候へ共前述の事情御令閨様へ呉々もよろしく願上候。

(行きにはわたし一人、歸りには妻子と共に暫く逗留してさんぐに厄介になつた臺ヶ原の友達の家からは、九月の末、妻などはこれが一生の別れでもあるかのやうな残り惜しい思ひをして離れて来た。この手紙は、わたし達の家がやつと定まつたといふ通知のはがきに對して友達から寄越されたものである。友達は郵便局長をしながら、一方で可也大きな製糸場を經營してゐる。)

十八 定めて毎日御多忙の事と

啓、御轉居の御葉書こちらで拜見いたしました。今月の初めからこちらへ來て居ります。どうか纏つた仕事をしたと思つたのですが、

さて何にも出来ないで閉口してゐます。その後の御様子は伺つてゐますが、定めて毎日御多忙のことと思ひます。新聞社のしごとは雑誌と違つて、その日その日が興味になつて行きはいたしませんか。私は月末には歸るつもりで居ります。今度は大分お近い故、歸つたら早速御邪魔に參りたいと思つて居ります。奥様へも宜しく御傳へ下さいまし。

(松村英一君からののはがき。轉居の通知に對する返事である。鎌倉に在る同君の親戚の別荘が發信地になつてゐた。)

### 十九 鐵道便で茸を少し許り

收穫で私も涼風君もつい御無沙汰いたしました。二三日來めつきり

寒くなつて、火燧でなければ何も出来ない様になりました。鐵道便で茸を少し許りと蕎麥粉を少し御送りしましたから、蕎麥粉の方は一袋だけ田山さんに上げたいと思ひますが、序もあつたら御届けなすつて下さい。茸は、治と云ふのですが、氣候が非常に遅れた爲めに、どうも澤山採れなかつたものですから、ほんの申譯程で御約束が十分に果されなかつたのを、私自身に對しても恥かしいやうに思つてゐます。末筆乍ら先生の新しい生活にお這入りになつたのを祝福します。併せて御健勝を祈ります。(蕎麥粉は涼風君が心配して呉れました。)

(小林草村君からののはがき。十月卅日といふに、もう富士見は火燧がなければならぬほどに寒くなつたと見える。一年中、火燧なぞ無

くて暮らしてゐる東京の我々には、聊か不思議な氣持さへされる。

二十 就職口の断り

毎度松村が御邪魔に伺つて居ります。其後の毎日のお仕事も嘸御心煩はしい御事とかげながら御察し申上げて居ります。先日はまたわたくしの仕事につきまして飛んだ御心配をかけまして恐入りました。松村が御話をうかゞつて参りましたから私にくはしく話し、尙よく熟考せよと申しましたゆゑ、昨日一日考へて見ましたが、やうやく一先づ御断り申上げることには決心がつかしました。

何か仕事を持ち度いと願ひは、子供を亡くしてからの私にしきりに起りました。それはゐても立つてもゐられないやうな寂しさが時々

襲つて参りますのと、無事な平易な日をむなししい心で過してゆくのに堪へられませんので、何かかうしつかり摺んだものがなくては生でゆかれない様な氣持から仕事を持ち度いと申出したので御座います。もつともこればかりでなく、他に生活に餘裕をつけたいのぞみもはいつて居るので御座います。御心配を願ひましたこんどの仕事の口などもごく樂で自分も遣つて見度い心持は十分にあるので御座いますけれど、何分家といふものをひかへて居りますと、毎日出るのも一寸都合がわるう御座いますし、それに昨日参りました母の葉がきで、ひとつは思とまることにいたしましたので御座います。母は別に一人で暮らして居りますものですから、心細がりまして、このごろよく來て呉れるやうにと申して参ります。はじめ先生にこのことを松村から伺つてもら

ひますときには、母の事など忘れて居りましたが、昨日の葉書で見ますと、なんですか母の心持なども思はれまして、(家のことは只今はまだ弟も居りますことですし、別にさしつかへはなからうとも存じます)が、このことは御ことわり申上げることにはいたしました。それでも仕事をもち度いといふ願ひは別に消えました譯では御座いせん。雑誌の訪問記者かなんぞならよろしからうかともぞんじます。が、さういふ口も御座いませんでせうか。あまり勝手な事を申上げてまことに恐縮で御座いますが、さういふわけで御座いますから、こんどの方は一先づ御ことわりいたしまして、このさき又いつなるとき同じ就業の口でも御願ひいたしますこともないとは申されませんからその時はまたよろしく御願ひいたします。

勝手な處は何卒不悪御免し遊ばして下さいませ。またほかによささうな事が御座いましたら御心配下さいませやう願つておきます。松村もよろしく申上げました。末ながらどうぞ奥様へも宜敷御傳へ下さいませやう。こんどは大分御近くなりましたゆゑおひまの折はお遊びに御こし下さいませ。

十一月五日

(松村英一君の夫人のらく子さんが、子供を亡くされた後の寂寥に堪へられないで頻りに仕事を求めてゐられた。丁度その折柄、わたしのゐた新聞社の方に婦人記者の缺員が一人あつた。わたしはそれに推薦してもいゝと思つたけれど、併しわたしは婦人が新聞記者の

やうな生活をするのをあまり好ましいことゝは思つてゐなかつたので、なほ一應の再考を促した。これはそれに對する返事である。

二十一 冬籠の支度に忙殺され

收穫も大方すみましたが、まだ何やかや野の仕事が残つてゐて、冬籠りの支度に朝夕は忙殺されてゐます。御大典が愈々迫つて来て、門松を立てる。花傘に提灯を表へ飾る。まるで、御射山祭とお正月とが一所に來たやうな騒ぎをしてゐます。田舎でさへこれですから、東京は嘸かし騒ぎのことだらうと想像してゐます。しめじはもう有るまいかと思ひます。干したのか漬けたのを見付けるより仕方ありませんが、味がぐつと悪いかと思ひます。あの時今少し見付けてお送りすれ

ば宜かつたに、ほんの少しばかりでいけないことをしました。それでも今日人を見付けて山へやりましたから、ひよつと誰も行かない所なとに残つて居れば少し位は探つて歸るかも知れません。

(しめじの味があんまりよかつたので、若しまだあるやうだつたら送つて貰ひたいと頼んでやつた返事を兼ねて御大典前の村の景氣を知らせて來たものである。御射山祭といふのは、わたし達がまだ富士見に滞在してゐた時分にあつた村祭で、競馬などの中々盛んな可也に賑かな祭であつた。八ヶ岳の裾野の高原のまつ只中に薄の御假屋を造るだけでも一種特別な興味のあるものであつた。小林草村君からののはがき。)



貧弱な生等は加茂の水音を聞きながら漸く牡蠣飯を食ふ位の所に候  
しかし京の夜は只でもよろしく候。

### 二十二 加茂の水音を聞き乍ら

(近藤浩一路君の京都から寄越した消息である。普通のはがきに四  
條あたりの加茂川を書いて、前景に牡蠣飯屋で二人の客が相對して  
ゐる姿が見せてあつた。専門の畫家ならずとも、繪筆の持てる人なら  
ちよつとスケツチなどして旅の消息とするのも興の深いものであ  
る。)

### 二十三 龍土會の通知(一)

龍土會十一月例会

時 十一月二十一日(日曜)午後五時より

所 麻布區龍土町(三聯隊前)龍土軒

會費 一圓二十錢

御出席の有無お手數ながら龍土軒内幹事宛にて御一報を願ひます

十一月幹事

上 司 小 劍  
中 村 星 湖

(文學者間の一つの交遊機關に龍土會といふのがある。随分古くか

ら續いてゐる會である。これは其の例會の通知の一つである。）

二十四 モスクワからの第一信

一兩日前、やつと下宿へ落ちつきました。幸ひ元氣です。寒さもまださ程でなく、雪もあまりふりません。今迄は下宿捜しに忙殺せられたので、明日あたりから一とほり芝居のぞきをするつもりです。随分うかくとして毎日くらしてゐます。それに日が短いので、一軒訪問してお茶でも飲んで話してゐると一日つぶれます。どうかお便りを下さい。『時事』で御轉居を知りました。奥さまへよろしく。

モスクワにて

片 上 伸

露曆十一月四日

(モスクワにあるゴオゴルの記念像の繪はがきの通信文欄にこれだけのとが書いてあつた。「お茶でも飲んで話してゐると」といふ所にいかにもロシアらしい氣分がある。片上君も郷に入つては郷に随つてゐるのかと微笑まれた。)

二十五 暮か正月かに

御端書なつかしく拜見しました。暮か正月かにゆつくり御眼にかゝつて積る御話申上度存じて居ります。代々木の先生の方でも無論御眼にかゝるべく期待してをりますやうです。御都合がよう御座んしたら廿九日頃からでも御供いたし度存じます。子供ももう峠を越しまし

たから乍他事御安心下さい。御無沙汰して居りますが奥様へもよろしく。雄司さんのお子さまお大事に。

(いつのか間に歳は押し詰って暮れんとしてゐる。其の中で白石實三君は子供に病氣をされて、一層慌しい思ひをしてゐるらしかった。それに暫く會ふ機會もなかつたので、どんな様子であるかと氣にかゝつた儘にはがきを出して見た。これは其の返事である。代々木の先生といふのは田山花袋氏のことである。)

二十六 十人ほど招きて

例の向島の新年會に、今年は十人ほど招きて飲みたしと存候。貴

兄も御忙しきならんが、何うにか都合して御出席被下度候。時日は四日午後四時より。

上司君にもこれと同じはがきさし出し申候。貴兄よりも御さそひ被下度候。卅日。

(この數年の間、田山さんは毎年向島で新年會をやるやうな例になつてゐた。これは其の招待状である。例の紫鉛筆ではがきへ走り書きがしてあつた。)

二十七 元旦拂曉の新年宴會

啓呈仕候。二六時中休止なき通信の任務に服する弊社は毎年新

春の幸先を祝する爲め元旦午前三時を期し社員一同相會して新年宴會を催し居候處大正五年は殊に芽出度く多忙なる新年にも有之候へば貴下の御賁臨を辱うし御鞭撻の榮を得以て社員一同更に進取の勇を振ふを得ば獨り弊社の光榮なるのみならずと存じ茲に謹んで御案内旁奉切願候。

大正四年十二月三十日

光 永 星 郎

(日本電報通信社の新年宴會の招待状で、印刷したものである。同社では毎年元旦の拂曉に社員一同を會して祝宴を張るを例としてゐる。初日の影が麗かに照り渡る頃にはいつも社運の萬歳を祝して散會するが、元旦勿々からこの緊張した心持を失はないやうにしてゐる。)

この社の人達の活動が實に目覺ましいものであることは、今は周知の事實になつてゐる。

### 二十八 旅からの年賀状

恭賀新年

天風君と二人で此處に来てゐます。五日頃には歸京するつもりです。

元旦

伊豆大島三原館 市 川 又 彦

(西洋の老女がするやうな鉢巻で髪の毛を包んで、帯を前で大きく締めた大島の女の繪はがきの表面にこれだけのことが書いてあつた。)

同じ年始状でも旅先から其處の風俗とか景色とかを偲ばせるやうな形を取らせた所が面白かつた。たゞ一様に印刷した年始状などは、年賀と健在を知らせる趣旨には十分に役立つけれど、趣味は全くないものである。

### 二十九 ロオマ字の年賀状

Voeux de Bonne Année 1

Boku wa kotoshi ni dossari nozomi wo kakete iru. Boku no kono ikita chikara wo dasu toki ga sematte iru no wo kanjiru.

Kimi to kimi no family no hito-bito no kenkô wo inori,

katsu O-Iwai suru

Kono aida no tegami wa nite kuruta kai ?

(ロオマ字がこれから先きどういふ風に弘まつて行くかは別問題として、いろんな方面でこれを實際に使用してゐる人達のだんぐ多くなることは否むことが出来ない。これは水野葉舟君からの年始状である。)

### 三十 雪未だ至らず

雪未だ至らず、野は冬のさびしさにつまれをり候。今朝山を見に行き申候。途中にてよめる

落葉ふむ鳥のおとこそさびしけれ林にそひし山みちにして

花袋生

兄の共にあらざるを惜しむ。

白 石 生

(元日の日附で白石實三君の故郷から寄せられたはがきである。これより先き、わたしも同行を勧められたが、わたしは仕事の都合で行くことが出来なかつた。白石君の故郷は、上州安中在の野殿といふ所で、上毛三山の雄姿を三方に仰ぐやうな地位になつてゐた。其處で望む淺間の煙も、晴れた日には殊に鮮かであつた。)

三十一 露曆正月二日

賀正、大正五年一月十五日(露曆正月二日)

御健康を祝します。小生も元氣です。これから何をしようかといふ

見當だけがやつと立ちかけて來ました。案外忙しいのでどこへも原稿を書いて送ることが出来ません。それに僕は毎日出歩いて居て、下宿の細君に少しうちにゐなさいと言はれる程です。如何に僕がうろく地図と案内記とで電車をのりまはしたり、ずうずうしく一寸した知りあひのロシア人のうちへたづねて行つて長話をしたりして、いろいろの滑稽をやつて居るかを想像して下さい。この國では頭は禿げてゐても、僕は二十四五に見られます。もつと若く見られるともあります。君もお忙しいでせうが時々手紙を下さい。日本からの郵便は一番待たれます。一週に一回月曜日に領事館へ行くのがなかく楽しみです。『讀賣』はこの間から社から送つてくれるので見てゐます。御別れしてからの御様子をかきかして下さい。奥様へよろしく。

モスクワにて 片 上 伸

(雀が丘から見たモスクワの全景の繪はがきの通信文欄に細かい字で書いてあつた。外國へ行つてゐる人が故國の音信を待つ心持はこれでも可也に想像される。一體手紙を書くのは億劫なものであるが、かう熱心に待たれてゐると知つては、さすがに書かすにはゐられなくなる。)

三十二 轉居の通知 (一)

啓呈仕候。

陳者小生儀今般左記肩書の所に轉住仕候に付此段御通知申上候

匆々

大正五年一月十八日

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町大字原宿字南原宿

一九六ノ五 光 永 星 郎

(はがきに印刷してあつた。そして點線の所で切り取るやうになつてゐた。)

三十三 早く進行しなければ

毎日御待ち申して居りますが、御約束の日もいつの間にか経過した模様です。吉江君を催促すれば、其都度前田君のはどうなつたかと聞

かれます。別に先方には深い意味はないのでせうけれども、こちらではいつもそれに牽制される様な形にもなります。夫れは別問題として貴殿の分も早く進行しなければならぬのですから宜しく願ひます。

一月廿四日

(博文館出版部の有田利雄氏からののはがき。西洋文藝叢書の一編として出すべき例のゴンクウルの翻譯の催促状である。この十日までには屹度、この廿日までには必ずと幾度び固い約束をしたか。そして幾度び違約をしたか。今、思ひ出しても冷汗の出るやうな心地がする。決して惰けてゐた譯ではなかつたが、思ふやうに出来ないで、ともすれば一時遁れの空な約束をしてゐたのであつた。)

三十四 減多にない暖い寒中

お端書をありがたく拜見いたしました。おそばを打つて貰ひましたからお送りいたします。田山さんの方へも一所に發送いたしましたから、大概は同時に届くだらうと思つてゐます。スケートも此三四日間暖かすぎるのでどうやら延期にでもなりさうな形勢です。然し今夜一晩の内にも堅氷が出来るかも知りません。今年のやうな暖い寒中はありません。東京は梅でも咲きさうに暖いこと、思ひます。今年の夏は今一度是非御出で下さる様に今から御都合して置いて頂きたい。小川さん(代議士)の別荘の傍の朝鮮人の別荘が借りられさうです。お出でになることが四五月に知れますれば、畑を耕して、茄子、瓜、



南瓜、十六など種を下して待つてゐます。田山さんにも是非今年はお出下さる様に御勧め下さい。村の方でも高原會といふのを組織して、來遊客に便宜を與へ款待するやうな接備をしてゐます。田山さんの所にお出でになつたら、よろしく御言傳下さい。只そば丈お送りしたきり便りは書きませんでした。左様なら。一月廿九日。

(信州の富士見は八ヶ岳の裾野といふ荒涼とした高原を控へてゐるだけに、蕎麥粉などは中々上等なのが産出される。其の蕎麥粉で蕎麥を打つて送つて呉れた時の手紙である。今年の夏も來られるならば畑を耕して野菜物を作つておいてやらうといふ所など、若い人達の厚意のほどが本當に嬉しかつた。小林草村君の手紙。)

三十五 龍士會の通知 (二)

二月の龍士會をこの二十九日の午後五時から、日本橋下槇町の末廣(通三丁目)で電車下車)で開くことにいたしました。どうぞ御出席下さい。 (會費は金二圓のこと)

二月二十五日  
小山内 薫  
後藤 末雄  
久保田 万太郎

(龍士會の通知は、先きにも一つ出しておいたが、これはそれとは全く形式が異つてゐる。通知狀のやうなものには大體の型のあるも

のだが、と言つて、いつも同じ形式に依るのはあまり知恵のない話である。なるべく分り易く、なるべく簡単に、いろ／＼と試みて見る方が面白い。

三十六 婦人記者として(一)

餘り立ち入りたる事とはおもふけれど、もし何等かの場合に婦人記者として○○○○○さんを使つて下さると本人の爲めに幸ひとおもひます。文章は極く素直の方、多少のキツトもあり、常識の方も普通と思ふ。一ヶ月ばかりも試験するつもりで當人がさし出す原稿を御監査下された上にて適當とおもはれたらば採用下され度く、本人へはそれとなくどの位まで適應するか進んで自分から試験される積りで前田君の

意見も聞き、自分の思ひつきをも書きして、それを前田君まで出して見たらば或は採用される機會もあらうと話して置きました。

漫然とした雑誌の訪問記者をして居るので兄弟との折合の上にもひどくよろしくない有様であり、旁々定つた然るべき生涯に入らねば、年ばかりとつて、當人も知らず識らず不幸な境に入つて行きさうで、さうかといつて自發的に何か特別な文筆の人となるといふのは現在の世間では非常に困難の事ですからそこを救ふ方法をと前から考へて居たのでした。よく見て、使へるものならば何卒君の手許で人として獨立の出来るやうにしてやつていたゞき度く、何れとしても御願ひしたく思ひます。極くいゝ人ですから考なくする／＼のうちに氣の毒な生涯をさせ度くなしと思つて居るのです。

御病人の事何卒御大切に。  
僕の方のも突發したので大取り込みに取り込んで居ます。兩三日中に當人がうかゞふでせう。とりあへず。

二十六日夜

(一人の婦人を新聞記者にどうかといふ紹介状であり、推薦状である。先づ其の爲人から技倆の程度を明らかにして、而かも其の人の將來を深く考へた同情を其の底に持つてゐる。誠に意を盡し、情を盡した行き届いた紹介状である。)

三十七 女中が見當らず

御はがき難有く拜見、お子さんの御病氣は最う御全快ですか、一向御無沙汰、失禮してゐます。僕の處は去年の秋から例の無サアヅアント主義でまたく失敗、年末から妻が風邪にかゝつたのを少し無理をしたので悪くなつた處へ、一月で女中は見當らず、一月の下旬までは子供相手にパンのみにて三度に三度を送つてゐるといふ慘澹たる有様で、やうやく二月に入つて女中は見付かつたのですが、病人はまだ寝たり起きたりして、ぶら／＼してゐます。

近いうちに一度ゆつくり御目にかゝりたいと思つてゐますが、君は火曜日以外には休みの日はないのですか。時間の都合をお知らせ下さいませんか。

僕は土曜日の夜は暇があるので。

三月二日

(吉江孤雁君からののはがき。日本の家庭で女中のないことがどんなに家族の者に不便な思ひをさせるか。有ればあるで、さまざまの面倒も起るけれど、無いとなると、それが爲めに、出来でもよい病人が出来来るやうなことさへある。殊に都會で中流生活をしてゐる者の身に取つては、時とすると、これ以上の不幸はないといふやうな氣を起させることさへある。)

## 三十八 軍人が大もての時代

御無沙汰してゐますが御變りはないですか。小生もおかげで丈夫で

あります。こちらにも謝肉祭の季節で、もう冬は去らうとして去りかねてゐるやうな時分になりました。モスクワ河の水門も雪どけの水の爲めに少しづつ開かれ、市中を往來する櫓が大分もう馬車に代りました。芝居のセゾンもやがて去るので、見そくなつて居たものを出來るだけ見てまはつてゐます。「吾等が生活の口」、ソログープの「死の舞踏」レミゾフの「ユダ」アルチャバシエフの「野蠻人の法則」などもその内にあります。沙翁記念の催しはまだ一向きません。芝居の方では何にも格別ないといふ話です。しかし今芝居でハムレットを出して居るのが一つあります。近いうちに見に行くつもりです。オペラでは「ロミオとジュリエット」を出して居ます。「吾等が生活の口」は、あのセンチメンタリズムが大學生などに大受けのやうでした。何しろ軍人

の大もての時代ですから、あの芝居でも「士官」といふせりふは皆「お役人」とか、「お客さん」とかいふ風にかへてやつて居ます。これは官憲の注意からか役者の方の氣がねからかは知りません。

新聞はいつもありがたく拜見してゐます。夏の間は、どこか旅行でもしたいといふ最初の考へでしたが、今の模様では到底むづかしさうですから、多分どこか田舎の村へでも行つて一と夏過すやうなことになるだらうかと思つてゐます。そして少くともことしの冬季は一度モスクワで過すつもりです。奥様へも何卒よろしく。

お忙しいでせうが時々お便りを願ひます。

五年三月二十二日モスクワにて

片 上 仲

(ツルゲエネフの肖像と、モスクワの赤廣場の光景と、この二枚の繪はがきに涉つて細かく書かれてあつた。やがて春の來ようとするモスクワの街の有様が、水門が開かれたり、櫓が馬車に代つたりする所に窺はれる。)

### 三十九 佛蘭西の旅も終に近づき

いよく佛蘭西の旅も終に近づき何かと心忙しく暮して居ります。そのため通信も送り得ずに居ますが幸に無事ですから御休心下さい。四月の末頃には當地を出發したいと思つて居ます。再び母國を見得るの日も漸く近いたことを感じます。

先日は御葉書難有く拜見しました。田山君にもお逢ひの節は宜敷。

三月二十七日

(バリの島崎さんから寄せられたはがき。いかにも氣持よく印刷されたジャン・ジャック・ルツォの若々しい肖像のまはりに、其の肖像の與へる感じを少しも害さぬやうに體裁よく書かれてゐた。島崎さんがバリへ赴かれてから丁度三年ばかりになる。久し振りでお目にかゝれる時がいよゝく近づいて來たといふ感じがどんなにわたしを喜ばしたか知れなかつた。)

四十 妻の母の一週忌にて

昨日はわざ／＼御出かけ被下しに、生憎妻の母の一周忌にて残念い

たし候。小林君にも氣の毒のことを致候。猶そばの禮申述度、草村君なりしか、涼風君なりしか、御次手の節伺上候。三十日の夜は甚だ失禮。猶いろ／＼御言申上度存居候まゝ、そのうち日曜日の午後より御たづね可仕候不一。

四月三日

(富士見の小林涼風君が二三日の暇を利用して遊びに出て來た。頻りに田山さんにお目に懸りたがつたので、二日に連れ立つて代々木のお宅まで出掛けて行つた。所が生憎な事にお留守であつた。これは其の翌日のはがきである。)

先日は御忙しいなかを誠におそれ入りました。ゆつくりお話し致すひまを得なかつたことをかへすべくも残念に存じます。お子様がたは此頃は御丈夫ですか。せいしく御大切になさいますやうくれくれも希望致します。こちらは昨日今日又しても雪降りになつて寒さも急にひどく感じられますが、それでも子供等はすこぶる元氣でさわいで居ります。

〔「還元録」を書いて故郷の糸魚川へ歸つて行つた相馬御風君から寄せられた四月五日附の便りである。糸魚川海岸網引の繪はがきで、

右手の奥の方には、能生岬がやゝ黒く、鳥首岬が更に一層遠く其の奥に霞んだやうに淡くなつて見えてゐた。「先日」といふのは同君の立つのを上野の停車場に見送つた時の事で、忙しい仕事に携つてゐたわたしの身體は、發車時間にもう幾らもない時にやつとプラットフォームホオムに立つことが出来たのであつた。

### 四十二 甲州の春は酣

先日は失禮しました。また歸りには御厄介になつていろいろ有りがたう存じました。

僕は二日に甲府に行き、歸りには郷里の方まで廻つて六日に生麥へ戻りました。

土屋節堂君に逢つた時、君のお噂が出ました。都合して一度お歸りになりませんか。甲州の春は 酣 です。奥様へよろしく。

(中村星湖君から四月十一日附の繪はがき。甲府の舞鶴城公園が鮮かに寫つてゐた。「先夜」といふのは田山さんのはがきにもあつた三十日の晩の事で、其の晩向島のある料理屋で田山さんを主賓とした四五人の宴會があつたのであつた。)

### 四十三 私らが發起者として

ほんの偶然な事から、私ら四人がある所に集りました。それは全く豫期しなかつた、都會に働く人達が路上で思ひがけなく集つたやうな

譯なのです。話は自然と古い文章世界に落ちてゆきました。私らの眼は輝き、私らの心は昔の夢の中に還つて行きました。私等は過去つた若い日の心を再び心に思ひ浮べてみました。急に、所謂文章世界出身者の會をやつてみやうぢやないかといふ話になりました。この計畫はほんとに私らの心をたのしくさせました。それで取あへず私らが發起者として幹事の役を勤めることにして第一回の會合を左の順序でやることにいたしました。あなたも多分同意されることと思ひます。すべての話はその時に譲りたいと思ひます。

一、時 日——四月十六日(日曜)午後一時より

一、場 所——日本橋區木原店、鴻の巢

一、會 費——金壹圓五拾錢



追て出席の有無は折返し日本橋區檜物町東雲堂内西村陽吉宛  
に願ひます。

昔の江原小徑 西村陽吉

昔の秋山京村 秋山眞澄

昔の木下シゲル 木下茂

昔の水守夕雨 水守龜之助

(思ひがけなくかういふ印刷したはがきが舞ひ込んで来た。ほんとに幾年か前の、文章世界の記者をしてゐた時分の自分の若い姿を見せつけられるやうな氣がして懐しかった。其の頃、わたしの休み日は毎週火曜日になつてゐたから、日曜の日の會には出席されなかつた

が、どうか盛會であるやうにと願つてゐた。)

### 四十四 野州躑躅の美しさ

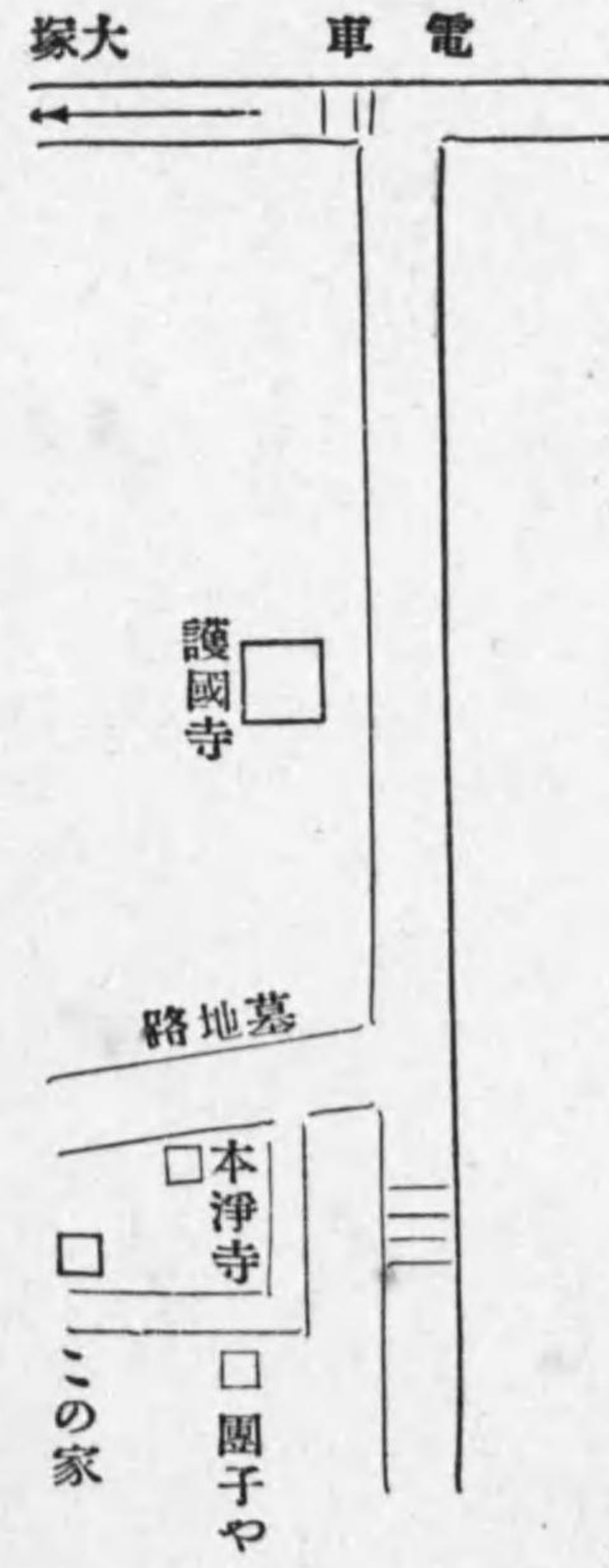
麓では梅と桃と櫻とが一緒に満開してゐるのにおどろきました。カタクリの花や野州つゝじの美しさにもおどろかされました。湖畔の山々にはまだ雪があります。當分こゝに居やうかと思ひます。

四月二十四日夜

(中禪寺湖畔のつたやに泊つた生田蝶介君からの繪はがき。豊かに風を孕んだ一艘の小舟が、湖畔に立ち並んだ三層樓の近くを走つてゐた。)

四十五 轉居の通知 (二)

居を移したくなり、例の性急に移り候。電車から三町位に候。



(はがきの裏面にこれだけ書いてあつて、表面に「府下雜司ヶ谷龜原一、窪田空穂」と書いてあつた。道筋が一と目に分つて訪ねて行くのにどんなに便利か知れない。)

四十六 婦人記者として (二)

爾來は御無音にうちすぎ居奉謝候。初夏新緑の節いよく御清適の御事と奉存候。さて突然には候へ共、御主宰の婦人附録女記者にさしあたり御缺員も無之候や。實は文章學院出身の秀才にて〇〇〇〇といへる人能文に有之、創作も感想風のものもかき、世なれて辭令に巧みに風采もすぐれたる方ゆゑ、訪問に御採用玉はるまじくや。年齢は二十三才、これまで〇〇の米人のたてし幼稚園につとめ居候が、やめて今度上京し來れるに候。御引立被下度願上候。先は御伺ひかたぐ御願迄草々。

五月十九日

金子 薫 園

(これも婦人記者にどうか、といふ紹介状である。名前や地名は、どんなことで其の人達の迷惑にならぬとも限らぬから〇〇にしておいた。たゞ紹介状、推薦状などの體を學ぼうとする人達の爲めに今一つ茲に載せておくことにしたのである。)

### 四十七 亡妻の一週忌に

拜啓

來る六月三日午前十時頃より私宅に於て故智恵子永眠一周年の追悼の爲め故人生前親交を辱うしたる方々を御招きいたし度く存じ候御案内申し上げ候 敬具。

六月一日

前田 晁 様

水野 盈 太郎

(水野君の細君が亡くなられてから早くも一年経つた。去年の其の日は、わたしは小石川の金富町の家で、家族の者を海邊へやつた留守を守りながら、何にも知らずに折柄の大掃除をしてゐた。知らせの電報に驚いて大急ぎで駆けつけたのであつたが、早くもそれから一年経つたのであつた。)

### 四十八 高原の氣象を

昨日一寸此處にまゐり、この別荘に草村、涼風の二君と俱に一夜を

すごし申候まをしきふらふ

高原かうげんの氣象きしやうを染々しみじみと味あぢはひ申候まをしきふらふ

四日

富士見にて 田山 生

(富士見高原の一角に代議士小川平吉氏の別荘がある。名を歸去來  
莊といふ。誠に絶勝の地を占めてゐて、其の二階からは、まともに  
近く奇峭極まる八ヶ岳の雄姿を仰ぎ、左に少し離れて悠揚と落ちつ  
いた蓼科山を望み、右には遙かに遠く、いつも中腹以下を白雲に蔽  
はれてゐる富士山を指さすことが出来る。この便りは、其の別荘の  
繪はがきに例の紫鉛筆で書き添へられたものであつた。裏面の別  
荘の屋根の上に、草村、涼風の二君が、これは筆で署名してあつた

が、それも懐しかつた。)

四十九 大ぶ切迫した心持も

おはがきうれしく拜見しました。こちらはもう夏になりました。小  
生も四五日内に田舎へ移り、二ヶ月程そこで暮すつもりです。田舎と  
いつでもモスクワの近くですから、おたよりは勿論従來の如く領事館  
宛に願ひます。筆不精して新聞へもおたよりを一向しませんでした。  
その内何かお送りしたいと思つてゐます。こちらは大ぶいろく切迫  
した心持ちも感せさせられるやうになりました。レヲルチャといふ言  
葉を時々ききます。馬車屋の人氣も荒くなりました。しかしこんなこ  
とは、あまり書いてはいけませんまい。

君のお作を、一日も早く読みたいと思ひます。君の沈黙も、随分長かつたやうにおもひます。御健康を祈ります。

六月八日

伸

(先年モスクワの藝術座で上演した『カラマゾフ兄弟』のアーリーナに扮したブートワの繪はがきに書いてあつた。戦争の影響が次第に感ぜられて来る心持が多少見えてゐる。)

五十 今日風が吹いて

三月十六日附おはがき、六月十日頃遅着、御子さんお二人とも御病氣なりし由、もはや快く成られしこと、は思へど御大事に。小生

二三日前モスクワから少し離れた村へ来ました。一ヶ月位はこゝにゐるつもりです。小生至極壯健です。ひろい野原を走りまはつたり林中を散歩したりして暫くくらすつもりです。もう多分領事館には六月の文章世界も来てゐるかと思ひます。一週間程したらモスクワへ一寸行つて郵便物を貰つて来ます。奥様へよろしく。

今日はこゝも風が吹いてルバーシユカでは少し寒い日です。

六月十七日

(夏を暮らす爲めに片上君はいよくマーモントフカといふ所に移つた。これは其處から寄越したものである。前便と同じ『カラマゾフ兄弟』の繪はがきで、レオニドフの扮したミーチャのちつと睨め

つけたやうな不機嫌な顔が、可也鮮かに寫つてゐた。

五十一 總見の案内狀

むつき會御案内

今回本郷座で開演する新劇場第二回公演に長田秀雄氏の社會劇『飢渴』が出ますので、私たちは作者のために見物したいと思ひますから、どうぞお出かけ下さいまし。

場所 本郷座第二案内所

會費 棧敷一圓五十錢 土間一圓

時日 六月二十七日午後五時半

大正五年六月廿五日

發起人 谷崎潤一郎 後藤末雄

木下奎太郎 吉井勇

田村俊子 岡田八千代

小山内薫 久保田萬太郎

(新らしい劇が上演されるに當つて、其の作者の爲めに、作者の友人達が發起者になつて文壇の人達の總見を催した案内狀である。)

五十二 七月の一日には

久しく御無音いたしました。相變らずお忙しい日を續けていらつしやる事と思ひます。しとくと梅雨が續いて、此の頃はまた袷を着て

火燧にでも入りたい様な寒さになりました。でも今日は漸く日本アルプスの峯が夕焼けしました。明日の天気が楽しみです。

七月の一日には田山先生が来られるから沈黙してゐたわたし達の生活も活気が出る事と思ひます。廣い山の別荘に一人で自炊されると云はれますから、わたし達も時々出かけて行つてお手傳ひでもしたいと思つてゐます。お忙しいことゝは存じますが、一日二日の閑なり得られて、是非先生にも御來遊下さる様にお待ちします。それに七月の一日と二日には田山先生のお友達の柳田國男氏が上諏訪に來られて、郷土研究の途次、講演をなさると云ふ事です。

そろそろ投書の心配もしなくてはなりません、今度は田山先生のお話から得たものを書きたいと思つてゐます。

烟浪君は先達てから、役場の裏にある信用組合の事務所に出勤する様になりました。お互に腰辨當の小使然としてゐる我々も、うんと發展する氣でゐるだけはおありますが、運が廻つて來ないか平凡の考や空想の様なものに捉へられて、だんく老人になつて行くのが悲しうございます。

六月廿八日夜

(いよく七月一日からは、田山さんが富士見の歸去來莊の直き傍にある平家建の別荘を借りて、其處で一と夏を過されることになつた。頻りに氏の來られることを翹望してゐた青年達の喜びはどんなであつたであらう。小林涼風君のこの書翰のうちにも其の歡喜の情

の一端は見えてゐる。村の知識ある青年達が、銀行員になつたり信用組合の事務員になつたりするのも面白い。

五十三 お口添を願ひたいとの事

啓

××君が来て、兄に御願の爲御目に懸りに社へ伺つたが御留守であつた。御願の要領は、△△の内に社員の動搖があるから運動するならば今だといふ意味の事を社中にある仲間から云つて来た。○○さんに御口添を願ひたいとの事で、猶御目に懸りに行くが、見えたら取次いで呉れとの事でした。妻子が出て来て家を構へてゐる容子です。困つてゐるやうですから御口添を願ひます。

御目に懸りに伺ひたいと思ひつゝ健康がすぐれない爲に億劫になつてゐます。白葉君の傳言で、御出で下さるかゝ實は心待ちにしてゐて失望しました。

『陥穽』が出来たら、四五人で君を客にして晩餐會を西川でしようと思つてゐます。その御つもりにも。

『頭が禿げる』を読んで微笑しました。頭のイ、ユーモラスな、日本式のチエホフといつた恰好の好箇の小品です。

毎日ゴロ〜。

七月一日

空 穂

前 田 兄



(××君といふのは窪田君の所へ近しく出入する青年でわたしも知つてゐる人。△△は新聞の名前。○○さんといふのは同社の社會部長をしてゐる人でわたしの親友である。どういふ時にどういふ必要で書かれた手紙か、これだけ言つたらよく分るであらう。「頭が禿げる」はわたしの書いた極めて短い小品で、其の月の『國民文學』に載せたものである。)

五十四 風呂も立つやうに

昨日此處に來ました。漸く自炊の道具なども買つたり借りたりしてそろへました。風呂もたつやうになりました。S君もR君もN君も皆な君の一日來り遊ばんことを望んでをります。日曜日あたりいかゞで

すか。

三日

信州諏訪郡富士見村

田山花袋

(豫定通り田山さんは富士見に行かれた。そしていつもの通り、すつかり自炊をなさうといふのである。七りんにかけてあるチャン塗りの紫色の薬罐などがふと目の前に見えて來たりする。不自由の中の自由を樂みながら、悠然と爐邊に坐つて、糞物の加減を見てゐられる有様なども、わたしには興味の深い一つの想像となつて浮んで來る。)

五十五 中央の知名の方と

大變御無沙汰してゐました。心にはかゝり乍らも、其日其日の些事に没頭してゐると、矢張りうかくと日許り経つて了ひます。田山先生は二日の朝來られました。先生も九日迄新聞社の方が休みだとか、田山さんからさゝりましたが、御都合を何うとかして、一度御來遊下されたいと涼風君とも常にお噂してゐます。此間は折柄來誼中の柳田國男氏がお寄りになつて、小川さんの方の別荘で、一緒に泊りました。中央の知名の方とかうして、ゆつくり逢ふことの出来ることを思ふにつけても、先生の事が第一に思ひ返されます。奥さんにも是非共來遊をお勧め下さい。

(小林草村君からののはがき。柳田さんが上諏訪で講演されるといふことは、前の涼風君の手紙の中にも書いてあつた。折柄田山さんもゐられたので富士見の高原へまはられたものと見える。そして其の一夜を歸去來莊に過された時に、青年達も一緒に泊つたものと見える。どんなに皆が喜んだことであらう。柳田國男氏は、今こそ貴族院書記官長で、傍ら郷土研究に心を入れてゐられるが、かつて二十年前には、新體詩人松岡國男として可也名の聞えた人である。)

五十六 島崎氏歸朝の由

とう／＼御出かけなきよし残念に存候。先日、柳田氏諏訪の歸り

に來訪、一泊いたしゆき候。またそのうち、上司君でも御さそひ、一晩とまりにて御出かけ下さるまじくや。青年達も大に待ちこがれをり申候。鳥崎氏歸朝のよし。宿所きまり候は、御知らせ下され度願上候。

九日朝

田山生

(どうかして行かうと思つてゐた富士見行きも、何かと心忙しく過してゐるうちに肝心の暑中休暇の一週間が経つてしまつて行かれぬことになつた。その由を田山さんの所までお知らせした返事がこれである。丁度鳥崎さんがフランスから歸られた時であつたことも、このはがきで思ひ起される。)

五十七 今度は腎臓炎を

思ひながら御無沙汰して居りました。其後は何かと後々の事御世話に相成りましたことゝ存じます。

一昨日こちらの病院の診察をうけましたら、肋膜の方は殆んどよくなつて居るが、今度は腎臓炎を起して居るといはれました。尿には随分蛋白があるさうです。ですから食物に困つて居ます。でも大した事はなささうです。熱はいくらか高くなつて居ますが、割合に元氣です。

(病氣静養の爲めに郷里の須賀川に歸つた水野仙子さんからの便りである。須賀川名所、岩瀬ヶ森といふ其の繪はがきには、樹木が鬱

蒼と生ひ茂つて、こんもりとした其の蔭が涼しさうな前の池水に映つてゐた。いよく歸るからと言つて暇乞ひに來られた時には、わたしは習ひ始めたばかりの寫真機を持ち出して、わたしの書齋の縁側に坐つたこの人の横顔を笑ひながらレンズに納めたりした。

### 五十八 死亡の通知

鈴木三重吉妻ふち儀病氣之處養生不相叶十九日午後八時於芝區三田松山病院死去 仕候間 御通知申上候。

追而來二十四日午後八時於京橋區西紺屋町銀座教會告別式舉行可仕候。

大正五年七月二十日

友 人  
總 代

安 倍 能 成  
丹 羽 俊 彦  
小 宮 豊 隆

(黒枠の附いたはがきに印刷してあつた。すべて死亡に關する通知や廣告などに黒枠をつけるのは、喪に服してゐる意味を示したものである。二十四日の告別式には、全く宗教上の儀式を用ゐず、會衆一同が一人づゝ交互に立つて、遺骨の前に百合の花を手向けることに依つて名残の多い告別をした。)

### 五十九 會葬のお禮

荆妻ふち告別式舉行之節は暑中御遠路にも不拘態々御來臨秘成下御厚情之段難有奉鳴謝候乍略儀不取敢以端書御挨拶申上候。

大正五年七月二十四日

鈴木三重吉

(これも死亡の通知と同じく黒枠の中に刷つてあつた。告別式に臨んだ人々に對するお禮の挨拶である。)

### 六十 始めて甲信の高原を

昨日精進から峠を越えて、この田山さんを襲ひました。これからまた山越で、小諸方面に旅路を進めます。 洛山 始めて甲信の高原を旅しました。大きな山や雲の形など見て居ると

まるで他界へ来た心地です。昨夜は小林兩君、名取君等と一緒に、田山さんの所で御厄介になりました。 加能生

君の細君が子供を連れて來月來るといふことを涼風君が言つてゐましたが、本當ですか。いつでも空いたところを提供します。花袋

(七月の下旬に西村渚山、加能作次郎の兩君が富士の裾野から路を甲府に取つて信州の方へ出て行かれた。これは其の時富士見の田山さんの所から三人が一緒に一枚の繪はがきに書いて寄せられた便りである。富士見驛から歸去來莊を望んだ其の繪はがきには、遠くに微白くなつて、兩君が青年達と一緒に泊つたといふ田山さんの借りてゐられる別荘も見えてゐた。)

六十一 湖上の風は涼しく

暴風雨や何かにて月末歸京の際も御目にかゝるを得ず残念に存候ひし。今、子供二人をつれてこの湖畔にまゐり候。湖上の風は流石にすいしく候。これから山に歸つて、長編をまた新たに書きはじめつものに候。『時は過ぎ行く』の校正は己に半を終り申候。一度御都合して御出かけ待上候。

二日

〔諏訪湖畔にて田山生〕として諏訪湖の繪はがきに書いてあつた。新たに書きはじめる長編といふのは、後に春陽堂から發行された

六十二 頭の中に火事が起つて

『一兵卒の銃殺』である。)

前略、銀座街頭の柳の蔭の灯の色は私も好みます。私は東京に居ると用もないのに晩から銀座まで散歩にまゐります。そこで健全なる腦力を以て活動する人を羨みます。私は森々たる老杉の頂點に澄んだ碧空を仰ぎ、純白の雲を眺めても、ヅエルレーヌや、ポオドレールのやうな、心の毒素が、始終頭の中を腐蝕してゐます。頭の中に火事が起つてゐます。

八月二日

日光山内唯心院内 徳田秋江

(見るからに涼しい日光湯瀧の繪はがきに、かういふ便りを書き添へて寄越された。併しこれだけでは「銀座街頭の柳の蔭の灯の色は私も好みます」といふ「私も」のものが意味が分らないであらう。それには次ぎのやうなわたしの文章が、其の少し前の「讀賣」の一日一信欄に載つたことを知つてゐて下されば、其處に多少の照應もあつてまた別様の興味も覺えられるであらう。さう思つて此處に再録する。——「風も通さぬ暑い部屋で、汗をたらたら流しながら、暑い夏の一日を忙しい仕事に暮らしてゐる時は、都會生活も餘り感心しないが、夕方、ガスの明るい光が涼しくなとかけた時分から、ぶら／＼と銀座の舗道を歩いて、そして足の少し疲れた頃に千足屋のツエランダあたりでアイスクリームを口に含みながら、忙しい都大路

の往來をゆつたりした氣分で見おろしてゐる時は、東京なればこそとつく／＼都會生活の幸福が思はれる。殊にこの頃の夜は街路樹の柳の色も鮮かである。)

## 六十三 隨分驚異の眼を以て

大變御無沙汰いたしました。あれから、それでもお出で下されずやと待つて見ました。東京はもう大變なことだらうと此方の暑さに引き比べて御推察申して居ります。田山さんは七月末に一寸御歸京、八月一日にはお子さん方を連れてお出でなさるやうに聞きました。またお伺ひもいたさぬので、果してお出でになつたかどうか知りません。何しろ矢張り食べ物の不便には少からず閉口の御様子でした。明日あ

たりお伺ひしやうかと思つてゐます。

田山先生はよく「僕などがかう云ふ静かな山村に来て、君達に色々なことをして見せるのは、たしかに山村の平和を亂すやうなものだね」と云つて、笑はれますが、私たちにはもうそんなことはありません。寧ろ想像よりも平凡でした。二十四日には博文館の西村、加能兩氏が來られ、同じ列車で英人ロバートソン、スコット氏も來られました。高原は丁度維新の頃しきりに外人が我が東海岸をおびやかしたやうな状態にゐます。村人の内には、随分驚異の眼を以て見てゐる人も多いらしく思はれます。さう云ふ意味から見ると、先生は丁度嘉永六年の米人ペルリの格でしたね。兎に角先生の御來遊が口火になつて、俄かに高原が天下に認められるやうになつたのを感謝してゐます。お暇を

見て、一度田山先生の御滞留中に御出かけ下さい。奥さんによろしく。奥さんがお出でになりたいと云つて、涼風君のところへ照會されたさうですが、もしほんとお出での御希望でしたら、如何様にも御盡力いたしますから、お勧め下さい。左様なら。

四日

(食べ物不自由といふことが第一の缺點となつて、空氣もよければ涼しくもある富士見の高原は、久しく避暑地として世に現はれなかつた。小林草村君の手紙は其の間の消息に幾らか觸れてゐる。今では避暑の人達も多少は入つて來るやうになつたけれど、それでもまだく静かな平和な山村である。)



六十四 今夜月明かに

子供達三人をつれて此處にまゐり候。今夜月明かに日本アルプスを照し、旅の興盡くるところをしらす候ひし。明日は木曾にまゐり候つもあり、明後日は歸山可仕候。日光の方は九月になりてからまゐり候つもり、今月一杯は富士見に居るつもりに候。

(信州の浅間温泉から寄せられた田山さんの消息である。日本アルプス山脈、白馬山大雪溪の繪はがきに、西石川旅館のスタンプが押してあつた。其の西石川の二階もしくは三階の縁側から遙に西の方を眺めると、日本アルプスの連嶺が白い残雪を其の皺々に持つたま

ゝ日に、もしくはば月に照つて、言ひやうもない旅の興を惹き起す。わたしが其處に泊つた時には、暑い日の中を夕立がさつと降つて来ては晴れ、降つて来ては晴れて行く其のさまが、いかにも鮮かな畫を見るやうで、それもまた忘られぬ景色であつた。

六十五 「陷窀」の寄贈を受け

拜啓。昨日博文館から「陷窀」の寄贈を受けました。貴下のお心によるものと存じ感謝いたします。序文の譯だけしかまだ拜讀しませんが、大變しつかりした、間違の無い譯である事を見て、貴下の長い間の御苦勞に對し心からの御禮を申します。日本人は世界のクラシックを日本語で讀み得る様にならねば大變損だと平常思つて居りますので斯う

いふいい譯の出た事を本當に喜びます。尙ほ詳しい感想はお目にかか  
つた時に譲りまして取りあへず御禮を申述べます。

八月十六日

高村光太郎

(長い間かゝつた「罪陥」がやつと出来た。譯者としては澤山賣れる  
ことももとより好ましいに違ひないが、それよりも先づ、わたしは  
是非讀んで頂きたいと思ふ先輩や友人を幾人か持つてゐた。わたし  
はさういふ人達に、博文館に頼んで寄贈した。従つて平素尊敬してゐ  
る高村君からこの手紙を貰つた時には、可也嬉しい心を持たずには  
ゐられなかつた。)

六十六 御登晃の御紀念たる

拜啓、最早本年も残暑の候、爾來の御疎音缺禮奉謝候。偕、今  
回御登晃の御紀念たる御高著「罪陥」一部御寄贈を蒙り難有奉拜受  
ユル。拜味致度樂み居候。小生事今四月五日に自坊へ引移り通  
勤の身と相成候に付、自然御閑暇も被爲有候は、御來遊の榮を蒙り  
度御待申居候。先は右御禮迄。草々不宣。

八月十九日

(大正三年の冬、これからいよゝ寒氣が烈しくならうとする十一  
月から十二月にかけて、わたしは日光へ「罪陥」の翻譯をやりに行つ

た。そして全く獨りである僧房の一室を借りてゐた。三日、五日の間は一言も口を利かずに過した時もあった。沈黙と労働との生活、それをわたしは心の中で獨り幾度び繰返したか知れなかつた。さういふ間で、何かにつけて常に世話になつたのは輪王寺の執事をしてゐる照尊院の和尚さんであつた。これは其の和尚さんに、やつと出来た『陷穽』をお贈りした返事である。

六十七 老女江島の墓を

山を越えて涼風、健郎二君と高遠を経て此處にまゐり候。久し振にて山のぼりをいたし候心地いたし候。高遠町にては、老女江島の墓を訪ひ申候。

信州伊那町旅舎 田山生

近頃こんなに疲れた事も、こんなに痛快に思つた事も無之候。行方不明の流行も思はれ候。

涼風

山越せば山また山に伊那の旅人にも逢はず久しかりけり。

健郎

(いかに山町のいふことを思はせるやうな高遠の町をほゞ鳥瞰圖式に見せた繪はがきに、三人三様の趣を見せた便りがあちこちに割據したやうに書かれてゐた。)

六十八 犬の吠えないのが

磯部に二三日ゐて此處へ来ました。満員の有様です。秋草が咲いて

ゐます。犬の吠えないのが仕合せですが、矢張騒々しくて執筆など六ケしいです。

僕の留守宅はどんな風でせう。(松山藩士で鳴雪翁によく似た人が留守番です。)

(伊香保温泉場全景の繪はがきで、表には「伊香保木暮第一別館、正宗」としてあつた。正宗白鳥君は其の頃わたしと同じ芝の葺手町の十八番地に住んでゐた。所が其のすぐ前の家の飼犬が毎夜よく吠えて困ると言つて始終こぼしてゐた。其の飼犬は今でもなほよく吠える。ほんとによく吠えるけれど、わたしの所とはちよつと離れてゐるので、さう氣にもかけずにゐる。其の犬の吠えるのを避けるや

うな旅をして同君は磯部から伊香保の方へまはつた。これは其の時の消息である。)

六十九 人物次第にて昇給

啓

帝大圖書館植松君より今日左のやうな照會に預り候。同館に寫字生を要する由、中學卒業程の人にて、文書の出入、本の番號を書くなどが役目にて、月給十二圓くらゐ、人物次第にてさつさと昇給させ候由、さうした者はあらずやとの事に候。小生には見當つかず候へども、中村君、保高君などの周圍にてそれにはまるやうな人ないとも限らず、あれば双方好都合と存じ候。間御伺ひ申上候。

尙女子高師の図書館の方にも口一つあり、此れは成るべく女にて、三十位の人、月給十五圓位の由、恰好の人候へば、これも御心懸下されたく、此方は九月までにて至急の由に候。草々。

(一方に人を求めてゐる者があれば、一方には職業を求めてゐる者がある。そして兩方で困つてゐるといふやうな事が世間には必ずしも少くない。これは人を求めてゐる場合の一つの照會状である。窪田空穂君の書翰。)

### 七十 この地の病院に入院

先日一日一信を一つと小品を三枚ばかりかきかけるとこの地の病院

に入院することとなりました。重なるものは腹膜炎で、これで都合五ヶ所ほどの故障です。病状が如何なる程度のものであるかは醫者と周圍のものゝ外知りません。私も今は聞かうともしません。たゞ推察して居ます。とにかく今分ではまだ死にません。熱は午後八度から九度の間の往來です。當分書く事は断念しました。半永住的の覺悟で入院してゐます。皆様に秋になつたらお目にかゝるといふお約束も、お流れとなりました。

九月十七日

(水野仙子さんから到頭入院することになつたといふ便りである。田舎で静養したら直きに恢復するだらうと思つてゐたのに、これは

また案外なことであつた。肋膜炎に腎臓炎に腹膜炎といふやうに、大きな病氣ばかりを五つも一つの身體に背負ひ込むことにならうとは。これではまるで人は病ひの器であるといふ標本にでもなつたやうな形である。併し、「今分ではまだ死にません」などといつてゐるその心の持ち方に、大丈夫恢復するといふ豫感が寓されてゐるやうに思はれて安心された。

七十一 茸狩の思ひ出を

久しく御無音でした。何やかや、此頃は氣忙しくて、ゆつくり御便りを書くやうな氣分にもなれませんでした。田山さんが歸つたので、又私たちは行き場のない淋しさを啣たねばならなくなりました。そい

ろに去年の今日頃が追想されます。吉山の所から、茸狩の思ひ出をかけた葉書を貰つたりしました。茸は氣候のせゐか、今年はまだ一つも見えませんが、『陷穽』が愈々御出版になり、何となく私たちが迄が肩の荷を卸したやうな氣が致します。是非一度拜讀しやうと思つてゐます。相變らず先生は御多忙のこと、思つてゐます。お體を御大切に、其内又茸でも御送りしたいと思つてゐます。左様なら。

(小林草村君からののがき。前年の秋には、わたし達は上諏訪の方からわざわざ出掛けて来た娘さん達とも一緒になつて、御射山神社よりもまだ先きの方まで茸狩に行つた。富士見へ行つてから幾らか山路に馴れた妻や子供なども、疲勞よりも興味の方を餘計に覺えて

喜んだのであつた。都會にゐると風物の移り變りもはつきりとは分らぬが、それでももう一年経つて、またあの頃になつたかと思ふと、ほんとうに思ひ出こそは懐しいものである。

七十二 紹介して頂き度く

此頃は博覽會で忙しいのですか。一度會ひたいものだとおもつて居ます。

此間吉江君の送別會の日は午後からひるねをしてしまつて、夜なかにめをさましてたうとうおくれてしまつた。一人で苦笑して居ます。

さて今日のお願ひは、〇〇さんを博文館の雑誌の人中山君か女學世界の人に紹介していただきたいき度いとです。委細の事は當人からお聞き

取り下さればわかります。この人の永いさきの仕事にもなり、日本人によくつたへられないことがつたはるやうにもなるかとおもひます。

くり返して言はなくつても御存知とおもふのですが、ブラックチカル イングリツシユの出来る人ですから、何卒好意を持つていただきたいき度く。先は御願まで草々。

二十五日

盈

晁 兄

(この手紙は開封のままで、表には「〇〇〇〇氏持参」と書き添へてあつた。これが紹介状の本式である。尤も、この手紙の始めの方には用件以外の事が少しばかり書かれてゐるが、これも親しい友達同

士の間であるから別に構はないであらう。當人から聞いて呉れといふ仕事の性質は、日本に永く來てゐる外國婦人の日本觀を聞いて、婦人雜誌に載せたらどうかといふのであつた。

七十三 去年の焚火の跡が

初茸を少しばかり御送りいたします。大へん腐り早い茸ですから、急いで箱を開いて下さい。

丁度去年茸狩に行つた所あたりで澤山に採れました。かすか乍ら去年の焚火の跡がありました。何とも云へない懐しい追想に思はず立たせられました。

田山先生の方へもお送りいたしました。

(小林草村君からののがき。茸は採つた其の場で焼いて食べるのが一番旨いといふので、前年の秋茸狩に行つた時には、わざと鍋やら醬油やら酒やら肉やらを背負つて行つたのであつた。そして高原の小松ばやしの中で焚火をして焼いたり煮たりして食べた。其の焚火の跡があつたといふのである。都會にゐて繁雜な仕事をしながら、かういふ思ひ出にふと出會ふのはどんなに懐しいことか知れない。殊に其の當時と同じやうな茸を同時に味ふことが出来るのであつて見れば。)

七十四 諏訪の秋も深く



秋が深くなつて來ました。私の町は昨今はふるへる様な涼風が流れてゐます。温泉町だけあつて乳色の湯氣が朝の静まつた中に何處ともなく流れてゐます。

高島小學の庭のポプラの木に夕日が悲しく光るのもこの頃です。田の面はもう黄ばんで取入に間がないのです。

八ヶ岳や……富士見高原も朝は一面に霧で包まれてゐますが、ひる頃から晴れた眺望は、先生にも御想像なさる事です。夜になると蟲が細つた聲でなき出します。諏訪はかうして秋が深くなり冬にうつるのです。

(前年の夏一緒に諏訪湖に船を浮かべたり、秋には一緒に茸狩りに行つ

たりした若い女性の一人から寄せられたものである。何といふこともないが、自然の風物の移り變りを書いたうちに、山國の町の秋に更け行く淋しさを思はせるものがある。

### 七十五 紹介状

小生の知人○○○君といふ慶應の理財科の學生を御紹介します。フランス文學をたのしみとして讀みたい。それには系統を立てて讀んで行きたいといふ希望を持つてゐて、その方針を立て、くれる人を得たいといつてゐます。教へてやつて下さいまし。無論英譯によつては、度々の邪魔はしないといつてをられます。御願します。

(窪田空穂君が知人を紹介して寄越した手紙である。かういふ意味で文學を読む人達が澤山になれば、日本の一般社會もすつと教養ある人達に充たされるやうになるであらうと思はれた。)

### 七十六 唐突の歸郷に際して

前田先生、残念ながら父キトクスグカヘレのために三日の夕方野驛から田舎へ歸ります。もう何を申し上げてゐるいとまもありません。何卒時節柄お健やかに暮し下さいまし。いづれまた上京いたします。その時またお目にかゝらせて下さいまし。  
中村兄によろしく仰有つて下さいまし。

(ほんとうに一と勉強しやう、一と仕事しやうと思つて、遠く都會へ出て來た青年が、まだ其の端緒にも著かないうちに、不意にのつびきならぬ故障が起つて歸郷しなければならぬ、としたらどんなにか残念なことであらう。これはさういふ場合に書かれたはがきである。殊に父危篤といふのである。歸り着くまでの汽車の中の心持など、思つて見たばかりでも胸の迫る思ひがする。)

### 七十七 歡迎會の通知

拜呈。秋晴の爽かなる時候となりました。就ては此期に際して、先頃フランスから歸られた島崎藤村氏の歡迎會を開くことに致しましたから、宜しく御賛同の上御貴臨の程を待たします。

- 一、期日、来る十四日(土曜日)午後五時。
- 一、場所、浅草下平右衛門町(柳橋)柳光亭。
- 一、會費、金五圓、當日御持參のこと。

大正五年

十月九日

發起人

田	山	花	袋
長	谷	川	天
小	山	内	薰

二伸、御手數乍ら御出席の有無折返し御申聞け下さい。

(島崎さんが歸朝された頃はあまりに暑かつた。何れ涼風が立つたら親しい人達が集まつて一夕の歡談をしやうといふやうな事になつてゐた歡迎會が、いよく開かれることになつたのである。往

復はがきで返事を取るやうにしてあつた。)

### 七十八 文展入選に對して

御無沙汰いたして居ります。文展入選に對して御祝詞を給はり難有存じます。あれは北海道より歸京後早々畫き上げたもので甚だつまらぬものなのです。あれよりも落選したもの、方に私は自信を持つて居ります。

御暇のある折はどうぞ御出掛けを。

十月十三日

橋 本 邦 助

(橋本君の出品した日本畫が文展に入選したことを新聞で知つて、

喜びの言葉を言つて上げた返事である。作者の自信のある作が落選するといふやうな事は、なにも文展ばかりではない。併し、そこが世間の事の單純でない證據で、複雑な興味もまた其處から湧いて來るのである。

### 七十九 正直の物言ひをして

拜啓

先夜は失禮いたしました。

あの際「時は過ぎ行く」をお讀みの由に承りましたが、僕はまだ書物を手にしないので解らないけれども、田山氏の自傳的小説であらうと推量します。その讀後感を土臺にして、過去の同氏の重なる作品に出

入して

### 『田山花袋論』

一編、三十枚乃至四十枚の物を新年の早稲田文學の爲めに御執筆下さいますまいか。近い親しい人が一番よく知つてゐる筈で、一番よく知つてゐる人が正直の物言ひをしてくれる事が讀者には一番うれしい有りがたい事だと思ひます。(先夜一寸御意見があつたのに、僕は僕の意見を申し出て置いた積りですが)一つ力の入つた物を書いて頂けませんでせうか、十一月一ばいに。願ひまで。

十月十六日

中村 將 爲

前田 兄机 下

(先夜といふのは島崎さんの歓迎會の夜のことである。其の席上で田山さんの『時は過ぎ行く』の話が出た。その話から多少の脈を引いたのか、中村星湖君からわたしに『田山花袋論』を書かないかといふ交渉である。一番よく知つてゐる人が正直の物言ひをすることの有りがたいことは、本當に中村君の言ふ通りである。)

### 八十 私自身の圖案を

私は主義として圖案家が製造家に命令をして品物を造らす様に成らなければほんとうのいゝ工藝品は出来ないと思つてゐます。今日の日本では圖案家は製造家に使役されていや／＼乍ら月給の爲めに俗悪な圖案許りをこさへてゐる状態です。私はこの意味から兼々私自身の圖

案を私の氣に入つた様に製作家に作らせて日常我々の周圍に必要な工藝品をいゝ氣持のものに仕たかつたのです。此度種々の事情からそれを實行する氣に成つて友人澁江君の經營される青楓圖案社から漸次左記の様な品を考案發售する事に致しました。當分のうちは極少數のものもを試験的に造つて同好の方に買つて頂き度いのです。どうか私の主義を盛立て、やらうと思召す特志な方や或は私の圖案に興味を持つてくださる方とにこの試作的工藝品をお求めくださる事を御願ひ致します。

(青楓記)

- 封筒
- 書簡箋
- 壁紙
- 圖案屏風
- 營業課目
- 刺繡衝立
- 捺染敷物

圖案集  
圖案書  
襖紙

更紗  
刺繡壁掛  
刺繡屏風

圖案葉書  
小家具  
文房具

大正五年十月

東京小石川區高田老松町三九

青楓圖案社

澁江終吉

(これは青楓圖案社の營業趣旨として廣く配付したものであるが、一種の書翰とも見られるもの故一つの作例とすることにした。昔の引札のやうな妙な文章ではもう今の人の心持を盛ることは出来なく

なつた。どんな文章でも生きた言葉で書かれなければ嘘である。)

### 八十一 大地を久振りにて

昨夜初めて南極星を水平線上に眺めました。本日アフリカの大陸へ上陸、早春の天氣、心持よく、大地を久振りにて踏む足の心持もまた格別です。

十月十九日

ダアバンにて 吉江喬松

(九月の初め、フランスへ向つて留學の途に上つた吉江君からの第一信で、ダアバンはアフリカの南端に近い船つきである。南極星を

水平線上に眺めたとか、アフリカ大陸へ上陸したとか、聞くだけでもエキゾチックな心地がする。"Typical Ricksha Boy," としてある水牛の角で頭をかざつた黒人の車夫の繪はがきも、たいぶ異様な感じを與へた。

## 八十二 病院は静まり返つて

先達て水野仙子女史の記事を拜見しました。彼女をいくらか知つて居る私は、あれを見てへんな氣がしました。あの記事に至つて初めて「今日の婦人」にふさはしくない内容をもつたものではなかつたでせうか。彼女が「未來の婦人」に編入されるものかどうかはさておき、あの記事は「過去の婦人」といふ題目に相應してゐました。(併しこれは彼

女、若しくは彼女を知つて居る私の不平ではありません。決して「たゞいどうも彼女があゝの題目の中にはひらうとは思はなかつたからなんです。そして要するに、どうでもいゝ事になつてしまふんです。呵々。この橋を渡つて人はおもむろに馬の脊のやうに長い町に入ります。繁みの中に見える薨は長録寺、こゝから打出す夜の鐘をきいて、人々はそれが九時なのを知ります。其時分吾々健康を失つた者達が横はつてゐる病院は、しいんと静まりかへつてももの哀しい調べに泣いて居る川下の水車の音に耳を傾けて居ます。

一際小高いの繁りにかくれてゐますが、其處に病院は幾つもの窓を有して居ます。

(須賀川の郡立病院にゐる水野仙子さんから須賀川橋の繪はがきに  
前半はおもての通信文欄に、後半は其の橋の上の餘白にこまご  
まと書いて寄越したものである。前半は其の頃の『讀賣新聞』の『今  
日の婦人』と題した記事に就いての抗議みたいなかからかひで、いはゞ  
樂屋落の興味を持つたものに過ぎない。後半の冒頭に「この橋」とあ  
るのは繪はがきの其の橋のことで、\*の符號は長録寺の臺の先きの  
方の小高い繁みに附してあつた。日附は十月二十三日。)

八十三 午後一時頃木挽町へ

ふいと御邪魔に上り御厄介様に相成りありがたく御禮申上候。  
次の日は先生の所を出て、三越や、松屋などへ参り、妹達へ土産など

買ひ、それより本石町の知己を尋ね、午後一時頃木挽町へ行きました。  
大變の盛況で、好い所はすつかり塞がり、二等の札で三等へ追ひ込ま  
れなどして「先陣館」迄見て出て了ひました。羽左衛門の盛綱には遂  
ほろりとさせられました。八時頃代々木へ参り、十一時で新宿から歸  
途につきました。「陥穽」はこれから涼風君とゆつくり味ひ度いと思つ  
てゐます。奥さんによろしく願ひます。先は一寸御禮まで。

(富士見の小林草村君が出て来たと言つて、ある朝田山さんが連れ  
立つて來られた。上野に文展のある頃だったので、一緒に見に行く  
ことになつた。晝飯は天金でといふことで銀座の方へ出掛けて行つ  
たが、一ぱいの人でどうしても二時間位は待たなければなるまいと



いふことだつた。で仕方なしに、其の傍のレストランで済ますことにした。丁度其の晩は、京橋のはつねといふ鳥屋に窪田空穂君の「鳥聲集」の會がある筈だつたので、上野からは自働車で其處へ乗りつけたりした。そして草村君は其の晩わたしの所に泊つた。その翌日わたしは草村君と別れて勤めに出た。この便りに書かれてあるのはそれから後のことである。丁度歌舞伎座では『近江源氏』をやつてゐて羽左衛門の盛綱が評判であつた。代々木といふのは田山さんの所のことである。

### 八十四 轉居の通知 (三)

轉居 東京市本郷區上富士前町三番地河上方 鈴木三重吉

私は「新小説」の改革以來當分の間好意的に同誌を主宰して居りましたが、私の勝手上、先月きりで單なる寄稿者に復歸して、すべての責任と煩勞を遁れました。今度の家は、市電巢鴨線原町下車、精神病院の右脇横町を突き當つて大通りを左へ一町足らず行き、右側の材木屋の左脇横町を突き當り左へ曲つて二軒目です。山手線駒込驛でお下りになれば岩崎邸前の大通へ出て二三町で上記の材木屋のところへまゐります。日曜だけは必ず終日在宅いたします。

(はがきの半分ほどに區劃をしてこれだけのことが印刷してあつた。後の半分は餘白のまゝにしてあつたが、多分何か書くべき用事があれば其處に書き込まうといふのであらう。)

八十五 僕は世間に向つて

又、暫く逢はないではありませんか。

いつかお願ひしたワードメイクが、今日多分出来て居ると思ふから  
すぐ君の處に届けさせます。十二月にはひつてからでいゝから是非婦  
人附録で何か書いて下さい。

あれは流布させていゝおもちゃだと思ふから、何卒御盡力を願ひま  
す。

それから、今僕は兼ねてからの希望であつた「聖書物語」を書いて居  
ます。これは子供達に是非いゝ讀み物を作つてやり度いと考へる處か  
らかゝつた事で、これが出来たらば、あとから、少年少女の讀み物を

五六冊書くつもりです。この聖書物語の事をよみうり抄の人に話して  
下さい。

二十日すぎの日曜に君が來るといふのを心待ちにまつて居る。その  
時に大變話したい。一月に珍らしく一つ小説を書いた。來年はどしどし  
書かうと思つて居る。

この用をすましたら、すぐ小品集にかゝるつもり。やはり「武藏野  
小品」と言ふ題にして。

もうちき僕も三十五になる。力限りの事をする時が來た。十年來の  
考へを一々實現する時になつた。僕は世間に向つて、全身を晒さう。

二十三日未明

盈 太郎

晁 兄

窪田君の歌集が、大變評判がいゝさうで、僕も喜んで居るとつたへて下さい。僕は少し人情に墮ちすぎて居ると考へられるが、世間の人があれを認めるのはいゝ事だ。(今の歌の一般から見ても) たゞ僕には、窪田君はもつと裸體になつてほしいと思ふ。感情と、類型的な人情の衣服をいつまでも着て居る必要はないからね。

(力限りの筆をしゃうくと思つてゐるうちに、人間はいつか年を取つて老いて行く。併しかういふ考に時々心に向けるのはよい事だ。人から言はれるだけでも刺戟になる。「僕は世間に向つて全身

を晒さう」といふこの力強い言葉が、わたしにどんな烈しい鞭の響きを與へたか知れなかつた。)

八十六 『高い會費』の作者へ

十一月の『國民文學』にお書きになつた『高い會費』を、非常な興味を以て拜見致しました。何といふ内容の多い文字でしたらう！ 先生はなあにつまらない、と仰有るかも知れませんが、併し、私は今どうしてもそれを此儘黙つて讀み過ごして了ふ事の出来ないやうな心の状態にあるのです。

それを拜見したのは、失禮ながら、今朝八時半頃青山から日本橋の店へ通ふ間の電車の中ででした。かやうに、今日の私は好きな書物や

雑誌も坐つてゐては讀めないやうな境遇にあるのです。僅かな金の差の爲めに、時間の上に於いて身を縛られる事により多いのを承知で、比較的時間の樂な新聞記者といふ職業から、よし相手が外國人であるとはいへ、兎に角算盤をはじいて事を辨じる番頭といふ職業へ身を轉じた私として、これ位の事は、勿論覺悟の前でなくてはならない筈です。今更らしく口にするのは愚痴めかしくていやですが、こんな些末な事をも尙多少感傷的に感じねばならぬ状態に置かれてゐる時に當つて、先生が『高い會費』の中で富んだ實業家と、脚本家のA氏とを對照して提出してゐらした幾つかの問題が、一入強く私の胸に應へたのも、強ち偶然ではありますまい。

先生は、實業家と脚本家とを對照して幾つもの條件を並記しつゝ、そ

の後に一々「それがどれだけ人間の價値を定める上の目安になるであらうか？」と仰有つてゐる。そして、「わたしはすべてに對して容易く何ともいふ事が出来ないやうな氣がする」と言つてゐらつしやる。全く、仰せの通りです。併し、今私には人間の價値の上下は少しも問題ではありません。只、「すべてに對して容易く何ともいふ事が出来ない爲め」に、自分が精神上にも物質上にも徹底した幸福を掴み得ないで絶えず不満足な不要な生活を送つてゐる事が如何にも情ないのです。私は此頃、此方へ變つてからといふもの、朝の九時から午後の五時過ぎ迄、殆んど一日の大部分を極めて退屈に送つて居ります。そして殆んど三十分毎に時計を眺めて、時のたつのを許り只管祈つて居ります。何といふ馬鹿くしい生活でせう。いや、何といふ恐しい暮し方

でせう。更に何といふ情ない事でせう。人は、多くの人は、寸刻をも惜んで、忙しい、充實した日を送つてゐるのに、只時の過ぎるのをのみ喜ぶなんて！ 思つて見れば餘り長く生きる身でもないのに、この短い一生の、しかも一番中樞だと思はれる時間を、全く心ない事に費すなんて！

かう考へる度に、私は總身ぞつと冷水を浴びたやうに感じるのです。が、その瞬間から店にゐる間は矢張り時計をひき出して見て、時の過ぎるのを待つてゐます。

こんな事を申上げると、何もそれ程に思ふのなら、そんな事は止し  
たらよいではないかと仰有られるかも知れませんが、それがさう行かない處にこそ私の不幸のすべての根があるので、私だとして、如何に貧

乏をしても、苦しくても、自分のしたいと思ふ通に直往邁進する事の如何に男らしいかを思はないではないのですが、いや、さうする事が出来たら如何に生き甲斐のある事ぞと思はない事はないのですが、では何がお前の一生を託する道かと自分に反問する時、私ははたと當惑せざるを得ないのです。

人間は何を爲すべきか、人は何に依つて生くべきか？

私にはまるで分りません。現在の私は自分の肉體が動いてゐるから生きてゐるだけで、生きてゐるから生きてゐるといふ以外、人類の生存といふ問題に對しては、何一つ分る點はありません。

一生懸命努力して、會心の作をする事。——と考へる事は度々ですが、會心の作をしたらそれがどうなる、小説を書いて、それがどうな

る？ と考へると、もう何にも分りません。何をして見てもつまらない。何を考へて見ても面白くない。矢張り、朝てくくくと出掛けて行つて、夕方てくくくと歸つて来る生活の軌道を情勢に依つて上つてゐるより外はないのです。此生活の生ぬるさ！ 人間の價値どころの騒ぎではありません。先生は「金のあるE氏の方が幾ら會費の高い會へも、出ようと思へば、好き自由に出られる事だけは確かである。これは疑ふ譯に行かない。わたしはE氏の方が幸福かも知れない、と思つて、云々」と仰有つてですが、私は思ふ事が出来る出来ないより、金の多くあるないより、人生の幸福は、此生ぬるさを切抜けて、何方へでも徹底したところにあると思ひます。金を作る事に唯一の満足を見出してゐる人も幸福なら、貧乏はしても苦しくても、自分の藝術を育て

てさへ行けばと思つてゐる人も、私から見れば一樣に幸福です。その人々にとつての幸福感に何の差別がありません。失禮な言ひ分ではありませんが、私はつい先頃迄、先生はその意味に於いて極めて幸福な方だと思つてゐました。何故なら先生は少くとも先生の言行は、藝術に絶對の權威を認めてゐられたからです。先生の眼は、如何に不如意な位置にゐらしても、常に一點藝術といふ光明をみつめて、輝いてゐたからです。それが、此「高い會費」一篇で見ると、此先生の幸福にも多少懷疑といふ不幸が浸蝕してゐはしないかと思はれます。私にはかう思ふ事が何となく痛ましく感ぜられます。しかも、これ迄は唯尊かつた先生が、何となく近く親しいものに感ぜられて参りました。

ア、いつの間にか夜が更けました。夜に入つてから出て来た風がしめきつた縁の雨戸を烈しく打ちます。先生も今頃はまだお仕事でせう。要もない愚痴の羅列に、貴重な時間をお潰させ申した失禮を謝すると共に、先生の終なき幸福を祈ります。頓首。

〔「高い會費」といふ小品を「國民文學」の十一月號に書いた。それに對して中村白葉君から寄せられた讀後感ともいふべきものである。〕  
『高い會費』にどういふことが書いてあつたか、それも大體の事はこの手紙の中で見當がつくであらうと思ふ。人間の幸福を何處までも徹底した所にあるとする中村君の考へ方が果して正しいか否かは兎に角として、「此生活の生ぬるさ」の中に不幸の芽が萌えかけて

あることは事實であらう。其處には一點の疑ふべき餘地もない。けれども更になほ一步を進んで「人間は何を爲すべきか、人は何に依つて生きてべきか」といふやうなことになるれば、何人といへども容易に答へることは出来ないであらう。

### 八十七 永く御芳志の紀念と

肅啓時下 益御清祥奉大賀候。陳は父湖一郎死去の節は、靈前へ御叮嚀なる御供物を賜り、御芳志の段誠に難有奉鳴謝候。就ては右御禮に替へ、御供被下候御香資は東京養育院、熊本瀨病院及岡山孤兒院に寄附致し永く御芳志の紀念と致度と存候。間右様御思召被下度 奉願候。先は以書中御禮旁御挨拶迄如此御座候。

大正五年十二月二十日

敬具

吉岡俊輔  
吉岡信敬

(靈前に供へた香資に對しては、何か品物を返しに贈るのが普通の習慣となつてゐる。もとはかたみ分けから起つたことであらうが、今は、多くの場合に單なる形式となつてしまつた。これはさういふ例を破つて、慈善團體へ寄附したといふ通知を兼ねての禮狀である。奉書の半切に石版で刷つてあつた。)

八十八 年始狀 (一)

年頭に際し貴兄の御健康を祈ります。

大正六年一月一日

中村將爲

(相手の人の健康を祈つたもの。)

八十九 年始狀 (二)

新春に際して貴下並びに貴下の御家族の益々御健康ならん事を御祈り申上げます。



大正六年元旦

小石川區茗荷谷町五十二

岡村千秋頓首

(相手の人の家族の健康にまで言ひ及ぼしたものだ。)

九十年始狀(三)

遠山雪

雪の富士萬世一系御代の春

水哉

謹しみて御題に依りて新年を祝し奉り候敬具。

丁巳元旦

東京市牛込區北山伏町二九

坪谷善四郎

電話番号一五五九番

(勅題に依つて新年を祝したもの。赤インキで印刷してあつた。)

九十一年始狀(四)

有爲多望なる大正六年の春を迎へ、御同様芽出度き限りと存じ候。此機會に於て平素の高誼を謝し、併せて將來の厚情を願上候。

西大久保二〇三

丁巳元旦

澤田撫松

(其の年の有為多望な事に主として祝意を寄せたもの。これも赤インキではがきの中央に小さく印刷してあつた。)

九十二年始状 (五)

賀正

お雑煮をたべ、屠蘇に酔ひながらも、一度は歐洲戦場のいたましい光景や、各交戦國民の不安な生活状態を思ひ浮べて見るのが、真に此新年を祝福する所以ではありますまいか。

歐洲戦争第四年一月元旦

東京市芝區伊皿子町四十二番地

白柳秀湖

(歐洲戦争といふ時局に思ひを向けさせようとしたもの。周圍を波線で圍んであつた。)

九十三年始状 (六)

我等が大正六年の曉に光輝あれ

荻原井泉水

旭に生きて皆うごく雲よ海ひろし  
人間の家に霜置きり霜を照らす日  
朝日出づるにたいうなだれて挽くは馬

東京麻布新堀町三番地

層雲社

大正、六十一—一

（俳句を主としたもの。——層雲社は井泉水氏の經營してゐる雜誌社である。）

九十四 年始狀（七）

笑賀新年

相變ららずニコニコ致居候、頭が禿げ懸り候、愈々八歳の娘の親爺に相成申候、相變ららず天活會社に在勤罷在候、小生命のあ

年 始 狀

る限り天活フィルムを御最負下されぬと、蛇に化けて七重八重執り著き申べく候。穴稽具。

元旦

森岡格雄

神田區裏猿樂町六番地

（自分の近況と希望とを書き添へたものであるが、これはまた笑賀といふ所にも格別の味があつた。）

九十五 年始狀（八）

謹賀新年

皆様の御健勝を祝申候。

身の慾を慎みて不足を云はざること

言の責を重じて信義を守るべきこと

意の駒を戒めて放逸ならしめざること

右は今日一日の勉めにて候。

富の味に酔へる者は奢侈驕慢の心起り

貧の苦を嘗むる者は發憤努力の勇を生む

右は本年一年忘るまじきことにて候。

東京府豊多摩郡堀ノ内村慶安寺

大正六年一月一日

沖 津 大 象

(二年の計は一月にあり、一月の計は一日にあり、一日の計は朝にあり、といふ格言を、年の始めに移して、我も人も力むべく戒むべきことを書き添へたものである。一年を通して忘るべからざること、日に三省すべきことと、確に身の修養に資すべきものである。)

九十六 年始状 (九)

謹で新年の御祝儀申上げ高堂の御清福を祈上げます。藝術座一同、昨秋中央興行として「アンナ、カレニナ」爆發を帝國劇場に開演しまして以後、京、阪、神、名、其他東海道筋の各地を巡演いたし十二月九日無事歸京、直に一月興行の準備に取りかゝりましてございます。今年も不相變演劇壇の各方面に及ぶ限り微力を盡したいと覺悟して居

ります。何卒舊に依り御懇情の程願上げます。先は年頭の御挨拶まで。勿々不一。

藝術座

大正六年一月一日

島村抱月  
中村吉藏  
松井須磨子

(一つの團體の事業の報告を兼ねたもので、將來の抱負をも述べてある。「取りかゝりましてごさいます」といふ言葉などに、自然と劇道の人であることを思はせる所もあつた。)

九十七 年始状 (十)

謹賀新年

前田君、君と一緒だつたら色々批評しながら市街を歩くことだらうなぞと一人で歩きながら思つてゐます、今は別に訪ねる人もなければ来る人もないので實際書物が何より愉快になります。が時々君の事を思つてゐます。思ひきつてやつて來ませんか。此處まで來ると實際自分一人を引しめて全力を擧げずばなるまいといふ氣になります。畫家も感奮するだらうが我々とても同じこと、この感奮の消えぬ間に勉強しようと思つてゐます。君思ひきつてやつて來ませんか。

(遠く離れたパリの吉江君からの年始状である。さういはれた所で  
簡単に行くといふ譯にも行かないけれど、淋しさうに暮らしてゐる  
朝夕が、それとなく思ひ偲ばれた。)

九十八 不思議にもこれで三度

三十一日付御はがき唯今(四日正午一寸外出して歸宅したばかり  
のところ)拜見仕候。大晦日とかゝれたる傍に三十一日の消印  
は見えながら今配達するとは郵便物輻湊の時とはいへ、局もあまりに  
無責任なと腹だ、しけれども及ばず、住吉といへばこゝよりは極めて  
近距離、貴兄時間の御都合あししとならば小生より御伺してもよかり  
しものをと遺憾に存じ候。貴兄とはこの二三年間會ふべくして遂に會

ふを得ざることも不思議にもこれで三度に候。この休暇には何處へも旅  
行もせず、元日の朝式に學校に出た計り極めて閑散なりしものをとど  
う考へてもものこりをしく候。不取敢右迄。草々。

四日午後

外 治

前 田 兄

(年の暮の二十八日の夜汽車でわたしは東京を立つて、丹後の天の  
橋立から大阪方面へ旅行した。そして住吉の帝塚山の傍に泊つた翌  
朝、伊丹の中學にある友達の所へ其の由を知らせてやつたが、時間  
の都合がつかかなかつたので逢はずに歸つた。この手紙は其の友達か  
らわたしの東京の宅の方へ寄越したものである。)

九十九 西風の吹きある日は

西風にしかぜのふきある日は寒さむけれど

つらなる山やまのゆきはさやけし

こがらしは落ちて平野へいやのあさ霜しもの

いち白しろくこそあけわたりけれ

上州小泉町にて

田山生

六日朝

一兩日りやうじつには歸京ききやう可仕候べくさからふ

(新年しんねん早々さうさう關東平野くわんとへいやに旅行りょかうされた田山たやまさんからはがきに歌うただけ二首ししゆ)

百 會友の紹介狀

書いて寄せられたものである。「一兩日りやうじつには歸京ききやう可仕候べくさからふ」はほんの追おって書がきに小ちひさく書かき添そへてあつた。

拜啓はいけい昨日きのうは失禮しつれいいたしました。

扱さて、突然とつぜんですが、神戸かうべの會友くわいゆう〇〇〇〇君くんを御紹介ごせうかいいたします。

御暇ごひまでございましたなら、御引見ごいんけん下さいまし。

別に御願ごねがひの筋すぢがあるといふのではなく、これ迄までき直接間接御指導ごしだうを受けました御禮ごらいを申上まをしあげたいのださうでございます。

一寸ちよつと、御紹介ごせうかいまで。匆々さうさう。

一月九日

(大日本文學會を經營してゐる島村民藏君から會友の某氏を紹介して寄越された手紙。文中昨日は失禮とあるは、前日歌舞伎座へ額田六福君の『出陣』を観に行つた時のことを指したのである。)

百一 昨夜宿直部屋で

一陽來復先づ御目出度う存じます。其後は打絶えて御無沙汰致し申候。君には筆硯益々御勇勝奉賀候。度々御作を拜見致し居り申候。其都度忘れたるにもあらず、御尋ねせばと思ふ事は思ひ居り候も一年増に引込勝と相成、つい生來の筆不性を適確に表はす様の始末にて御疎遠勝に流れ居り候。昨夜宿直部屋で、計らずも福日

紙の『床屋の半時間』を拜見致し候。甲斐田先生、おいよさん、戀の女神！昔の私としても思出に樂しかりし過去が今更の様ひしくと感ぜられ申候。差出磯畔の風光、笛川の流、今も昔に變らんや。今年の冬は久々にて歸省、山峽の情味に接せんと樂しみ居り候。鈴木君健在か。御序もあらば宜敷。

(故郷にゐた時分の舊い友達で、最後に別れてからも最早七八年も経たうといふ人から新春早々思ひがけない便りを受取つたのがこれである。『福岡日日新聞』にわたしの書いた小品が友達に昔を思ひ出させたのだ。今は遠く朝鮮に行つてゐるこの友達と、わたしは少年時代に、同じ土鍋の飯を食べながら互に砥礪し合つたものである。)



百二 精神論だけ御一覽

拜啓、別冊は故人桑原氏の著、同氏は静岡師範學校教頭として教育に従事せられ、傍ら精神研究をなし、弟子によりて學説も實行方法も一層進歩し、成績擧がる事と相成たる儀に付、別冊の精神論丈御一覽被成候はゞ、治療法の概念は得られ、明日實驗を御覽の節の参考と相成るべく御覽に入れ候。

此書の理論よりすれば、宗教不必要の結論を得べく、又宗教大必要ともなるべく、此理論をわきまへての信仰は迷信に對する理信とも見らるべく餘程興多く候。近時精神研究盛になり候折柄、一二時間の御ひまつぶしにて他山の石ともならば幸甚に付、是非明日御來車

奉願 上 候

(二月一日の午後、親戚から電話がかかつて、不思議な精神治療をする人が佐渡の方から出て來た。果して本當に有効なものならば一と肌脱いで後援をしやうと思ふ。就いては明日實驗をする筈であるから見に來ないかと言つて來た。わたしは行くことに約束しておいた。すると其の晩になつて『精神靈動』といふ書物をわざと書生に持たせて寄越した。これは其の時の手紙である。)

百三 懇親雜談會の通知

拜啓毎月三日の夜を期して弊社主催の懇親雜談會を開きたいと思ひ

ますからお繰合せ御出席を願ひたう存じます。今月は次の通りです。

時 二月三日午後五時より

所 江戸川畔清風亭

會費 金五十錢

右御案内まで

（これだけはがきに書いてあつて、おもてに早稲田文學社の印が押してあつた。）

百四 山の雪美しく

再び此町にまゐり申候。ことによれば永くをりたしと存候。

二日。山の雪うつくしく候。

花袋生

（宿屋に泊ると、「宿帳を」と言つて來る時に、其の硯箱には大抵尖きのきれてしまつた秃筆がはひつてゐる。其の秃筆を思ひ出させるやうな文字がはがき一面に書いてあつた。そして表面には「上州赤岩町新田屋」としてあつた。）

百五 一度御會談被下候様

呈 近頃更ちかごろさらに拜顔はいがほを不得えさふらふ候處ところ非常ひじょうに御多忙ごたばうの由よし拜承はいしょういたし結構けつこうの御事ごんじと存上ぞんじあがせ候まふ。然しかるに豫かねて御話ごはなし申上まをしあげ置候おきまさらふ。新聞社しんぶんしゃの○○○○

氏本日來京、京橋區南鍋町一ノ三、三橋亭宿泊中に候。本夕會ひ、明日正午より一時迄の間に貴臺御紹介致度候に付在宿有之度約束致置候間、是非御差線被下候て一度御會談被下候様御願申上候。此段當用のみ草々。

(親戚の者の關係してゐる或る地方新聞の幹部の人が、小説を依頼する必要から中央文壇の様子を少し知りたいといふ話があつた。その人が上京して來たので、親戚の者がわたしに會ふやうにと言つて來たのである。直ぐ近邊に住んでゐるので、夜になつてから書生に持たして寄越したのである。)

百六 讀み方が淺薄で

此頃田山先生から「一兵卒の銃殺」を頂いて讀みました。そして早速讀後感を先生に書いて送りました。正直に云つて彼れはあまり傑作でなかつたと思ひました。只あゝ云ふ事件に興味を持つて書いたのみで、外に何もないやうな氣がしました。何故かあれを讀んだ後で、私は只筋の面白い芝居か活動でも見た後のやうな空虚な悲みを覺えました。矢張り私などの讀み方が淺薄である爲に、かくされてあるもつと大きい或るものを見落してゐるのではないかと考へて見たりしました。で、先生のお考へはどうであつたか？ 参考の爲にお聞かせ下さい。それから彼れを見て一寸頭に浮んだことは……………(略)……………

文世の新年號の公開狀では、田山先生からお叱りを受けました。只一時の興に驅られて、あんなものをかいた私自身を悲しんでゐます。皆様は皆御無事ですか？ 今年のやうに寒さの續くことも稀らしいと思ひます。明日は飛行機が私たちの頭上を飛ぶと云ふので、大へんな騒ぎをしてゐます。奥さんによろしく願ひます。

二月九日

小林草村

(耐寒飛行の試みに、所澤から一氣に諏訪湖まで飛ぶといふ話のあつた時である。富士見あたりの人達がどんなに好奇心を持つて待ち設けてゐたか。想像されぬ事もなかつた。)

百七 不相變忙しくて

赤岩はちき歸つて來て了ひました。それで向うに宛てたおはがきは今日拜見しました。不相變忙しくつて、その月ぐらしの惨めさをつく／＼感じてをります。此の間正宗君が來て見れました。その中一度お伺可申上候。

十六日

(赤若に永く滞在されるやうなら遊びに行つて見たいが、と田山さんの所へ御都合を聞き合せて返事が代々木のお宅の方から來たのである。)

百八 半島の寒さは又格別

曆では寒も明けたが、半島の寒さは又格別に候。三十年來の寒さだと言ふ零下二十三度を最低として三十度の最高、而かも手鍋下げる孤獨の生活と来た日には、随分たまつたものではありません。妻を携帯してゐて、朝十時頃床をしぶく起きて、おみおつけの二度も三度もわかし返しの面倒して貰ふ人には到底味ふ事の出来ぬ辛さを今年と云ふ今年五年間の放浪中始めて味ひました。それでも朝六時に起きて、釣井戸の鎖が寒気で掌上に氷りつく(ほんとうだよ)その冷水を、寒風に晒されながら二三杯頭から浴びた時の勇氣はまた格別で、自分ながら多少の誇りを覺えて微笑せずには居られません。今年もこの冷水浴

で先づ八分通り寒を切りぬけました。

何時も生活は平々凡々で、是れと言つてお知らせする程の材料もありませんが、六年間病み疲れた私が両親と妻子とだけは寒さにも泣かせずに扶養して居ります。子供も唯だ女の子が一人、今年十三になつて故郷の小學校の六年を三月には卒業します。女學校へ入れるなんて言つて来て居りますが、女でも高女位は卒業させて置きたいと思つて、その計畫で居ります。

當方へは大正元年の十一月飄然と参りました。元年即四十五年の三月、花の咲く頃、私は例の治療で岡田耳鼻科に入院して、口中の切開手術を受け、そこへ丹毒が飛び込んで四十二度の熱と戦ひ、死ぬと云ふ境地をこぎぬけて、年の九月、先帝陛下御大患の發表された

午後退院しました。約半歳居りました。實は最後の手術を爲す考へで入院したのでしたが、そんな具合で、九死の場合に遭遇し、家内も、親戚も驚いてもう止めろとの事で断念しました。大分いちり廻された鼻や口は、それはく悲惨のものです。口も十分にならず、鼻の方も生れも附かぬ不具となりました。今では義鼻を用ゐて居ります。私の疾病六年間の事でも書いたら随分書けるだらうと思ひます。

當地では、大枚三十圓の郡の雇でぼつぼつやつて居ります。それと學校組合の會計兼書記を囑託されて、此の手當が月十圓、其の他の收入としては、月々平均五日間位出張するそんなものですが、私としてはこんなものかも知れませんが。ははは。此頃は佛書に親しんだり、新刊書籍でも見るのが第一の楽しみで、作詩の方もさして進歩せぬ様

ですが、鮮人相手にぼつ／＼繼續は致して居ります。

今年の冬は一度歸省して見たい考で居ります。一昨年の夏父が病氣の急電に接して久々で帝都に入つたが、朝鮮の山の中で暮して居つていきなり東京驛へ運搬されたので、一時はブーツとして自分ながらへんでした。冬歸省したら久々で御目に掛る機會を得るかも知れませんが。

本を安く見る工風はないでせうか。新刊の本を見たいがとても續かない。露店でもあさつたら色々の本が手に入るだらうね安價で。

△△△△君も遂に鬼籍に入つたつてね、氣の毒な事をしました。君と十肥皮膚科で袂を分つてから随分私にも變つた事があります。もう年をとつたよ。南の〇〇〇〇の××に惚れられた頃はこれでも若か

つたものだが。ははは。頭髮既に霜を置く様になつた。けれども至極真面目にやつて居りますから安心して下さい。只だもう君の書面でももらふと懐舊の情に堪へられないのです。矢張り昔が戀しいね。  
こんな詩があるよ。

天涯流落感年華。東望甲陽路又賒。目送歸鴻凭欄睡。春風吹夢故園花。

重陽の詩で

憶到笛江舊酒樓。蓼江鱸碧總悠悠。絕無黃菊添吟趣。也莫青樽掃宿愁。歸夢難真半窓雨。鄉心時繞一籬秋。慇懃將問登高客。當日風光尙有尤。

又便りを致します。今夜はこれで失禮する。時々消息を聞かせて下

ね50

二月十六日夜

(福日紙から糸を引いて、昔の事を思ひ出した舊友から二度目に来た手紙である。現在の状態から一別以来の消息を細かく書いて寄越した所に懐しい気分が豊かに漂うてゐる。二十何年前に田舎で一緒に習つた漢詩が、友達には今、役立つてゐるのであると思へば、あの時分、冬の寒い晩に平仄がどうの押韻がどうのと言つてゐたことなども思ひ出されて来て、ほんとうに懐舊の情に堪へないが、昔の事を思ふと、若返るやうな氣もするけれど、同時にまた、つくづくと年を取つたことをも感じさせられる。)

百九 例の靈動の影響が

大變御無沙汰して居ます。僕の家では三人とも、例の靈動の影響が来て、ひどい疲勞が起り、随分へんでした。それで少し休み度いものだと思つて居ます。何れ近いうちに、君に逢ひに行つてよく話ませう。中々面白いことがある。川上氏にもだが、久野さんの兄さんによろしく。

(精神治療の實驗を見てから、わたし達は其の効果の眞實を否むことが出来なかつた。この手紙を寄越した水野葉舟君もわたしと一緒に熱心な信者になつたのであつた。そして茲に靈動の影響とあるの

は遠隔治療の際に起つた靈動の影響で、施術者の調節を請はずに放任しておいた爲めに疲勞を感じたのであつたといふことが後に分つた。川上氏といふのが其の施術者である。)

百十 寒いけれど静か

寒いけれど静かで、キンクワイには適當です。

伊香保蓬萊館木暮方

劍

(禁煙、禁酒に對して、上司小劍君は禁會といふことを言ひ出した。人の澤山集る會に出るのは好ましくないといふのである。これは榛名富士の繪はがきに書いて寄越したので、ちよつとしゃれを言つた



形である。)

百十一 黒い詰襟を着て

これは私の前任地でございます。こんなちつぽけな小學校に黒い詰襟を着て、職員室でアミダくじをつくつたり、子供と追ひ合ひをやつたりしてゐます。なんのかのと申しましてもやつぱり遊民の一人らしいでございます。

(現任地の繪葉書がありませんから。)

(尾張の方の小學校にゐる青年で、まだ會つたことはないが、書いた物の上で互ひに知り合つてゐる人から寄せられたものである。前

任地だといふ尋常高等小學校の繪はがきに書いてあつた。)

百十二 大茶目を演じて

此の間は御馳走になりました。奥様にも宜しく願ひます。寫眞は如何でしたか。

あれから若い叔父を呼んで、私の行を盛んに祝つて、痛飲淋漓に二日間をひたつてゐたので、家に歸つても氣持が悪く、寢てゐても苦しくてたまりませんでした。烟浪兄は私の上京を行衛不明と見なし、草村兄はまた突發の銀行の用事の爲に、歸國を電報で促すと云ふ大活劇になりました。所が御當人は酒臭い空氣を室内に吐き出して苦しんでゐると云ふ大茶目を演じてゐたのです。今になれば馬鹿々々しくて

吹き出さずにはゐられませんが。

四日の朝の東京の雨の降つた時、こちらは雪で、一尺五寸も積つたのに今日も亦雪が降つてゐます。此所暫く閑居してゐる私にはふさはしい形であります。先づ御禮旁々御知らせまで。

三月九日

(富士見の青年の一人が、この夏、朝鮮の方へ行くことになつたと言つて、前途の希望に躍るやうな眼をして東京へ遊びに出て来た。わたしの所へ来たのは三月四日の朝、田山さんに連れられてであつた。丁度其の日は久し振りで龍土會が開かれるといふので、田山さんとわたしとは夕方から其の青年に別れて四谷の方へ行つた。この

書翰に書かれてあるのは其の後のことである。)

百十三 旅に半月ばかり

十日から宇治、京、大阪、それに奈良の旅に半月ばかりすすつてもりでゐます。

山見つつ友と語らふ京住居松の梢に吹く風もがな

十四日

大阪にて 生 田、蝶 介

(宇治名勝、浮島多寶塔の繪はがきに、いかにものんきな旅らしくかう書いてあつた。)

百十四 お引越したるなら

僕、明後十八日の日曜日に他へ引越すことになりました。いつかお話があつたのでお知らせします。若しお引越したるやうでしたら、明日の午前でも御覧においでになつては如何。十八日の午前でもいゝが、君がお入りになるやうなら僕が私費をかけて取り付けたもの少々あり、それを残して行く。家賃〇〇圓、敷金は僕から話しすれば無しにしてくれます。

(かう言つて来た上司君も、方角が悪いからといふ家の人達の抗議には勝てないで、引越しを沙汰止みにしてしまつた。)

百十五 女らしい向上心を

忘れねばこそ思ひ出さず候。仙臺の遊女高尾の手紙ではございませんけれど、私の心にはいつだつて先生が生きてゐます。

先生、二年前に先生がいらつして下さつた南信の里。高原の町も今全く目を覺ましました。長い冬眠の間、自分の胸の血の音がきこえなかつた私の心にもなつかしい波の音が共鳴してゐます。私は今、レナウの詩を久しぶりで思ひ出してちつと立つたまゝ夕暮れの春の景色に見入りました。胸に迫るものは實に申しやうもない佗しい思ひでございます。小説も詩も歌もすべてを保護者にとり上げられてしまつた私は、やさしい美しくしい女らしい向上心をすっかり失つて了ひまし

た。只すべてに對する反抗心のみが日に月に成長して行くばかりでございませぬ。先生どうぞもう一度來諏下さいまして、死にきつた淋しい姿になつてゐる私の心をよみがへらせて下さいませ。今年の夏には〇〇〇〇様や〇〇〇〇様なども御來諏下さるさうでございませぬから先生もせひいらして下さいませ。

二月二十日

(二年前の夏、諏訪で會つた一人の女性から、其の友なる人の上京するに託してわたしの所に寄せられたものである。聊か輕卒な、と思はせるほどに書き過ぎた言葉もあるが、自由を縛られた人の淋しい心持だけは見られぬでもない。)

百十六 雪道を越えて

急の思ひ立ちで此處に參り候。數尺の雪道を越えて淺間山の麓を通り候。

二十七日

草津温泉山幸館方 小林 涼 風

(上州白根山頂上の白根神社の繪はがきに書いてあつたが、それがまたいかにも荒涼とした、そして峻しい山の趣を見せてゐた。もう三月も末であるのに「數尺の雪道を越えて」とある所にも山の深さが想像された。)

百十七 今次の總選舉は

肅啓

尊堂益々御清祥奉賀候。陳者方今の太勢内に憲政の美を濟して興國の根基を固うし、外に國光を宣揚して民族の發展に力むべきの時に際し、昨秋の政變以來、政争の題目は逆轉して初期議會以前の狀に復り、遂に不自然なる衆議院の解散を見るに至り候儀爲國家深憂の至に不堪候。隨て今次の總選舉は、國民の立憲的良能を發揮し、興國の大事を確立すべき時機と信じ候。茲に本會の名を以て推薦する候補者淺川保平君は、政見穩健、操守堅實、其蘊蓄する所を政界に貢獻せんとする新進の俊才にして、公論を議政府に代表すべき適材と相信じ

候に付、賢臺及同志の御贊助を得て必ず同君の當選を實現候様悃望の外無之候。切に賢臺の御配慮を願上度、蕪書を以て特に得貴意候。敬具。

大正六年三月

憲 政 濟 美 會

副會長 大 隈 信 常

會 長 高 田 早 苗

(衆議院議員候補者の推薦狀の一つである。憲政濟美會の次ぎに副會長を先にし、會長を後にしてあるが、これは連名の時に、發信者の方は地位の低い者から先きに書き、受信者の方は地位の高

い者から先きに書くといふのが作法だからである。

百十八 休息するつもりで

前田兄

昨夜は失禮しました。

けふ僕は此の地に参りました。すこしくたびれたから休息するつもりで。

四月三日

相州湯河原中西屋

中村 將 爲

(湯河原の藤木川の溪流の繪はがきはわたしに會遊の地であるだけ

にさまざまな記憶を喚び起させた。直ぐまた後から寄せられた繪はがきに、

はるくくとひとり入り來し相摸路の土肥の湯河原春淺みかも  
と一首の歌を書かれてあつたのも懐しかった。

百十九 舞鶴で下りた爲め

舞鶴で下りた爲め、汽船場まで荷物を持って歩いて閉口しました。  
今、文珠前で中食を待つ。

正 宗

(四月七日、天橋風景、文珠山門と多寶塔といふ繪はがきに書いた

この思ひがけない便りを受け取つて、わたしは其の數日前、帝劇で  
正宗君と會つた時の會話を思ひ出した。其の時わたしは正宗君の間  
に對して、宮津へ行くには、海舞鶴から連絡船で行くよりも舞鶴か  
ら自働車で行く方が簡單でよいと答へたのであつた。所が、このは  
がきで見ると、自働車がなかつたのらしい。それだと僅か一哩しか  
ない所ではあるが、荷物を持つてとぼとぼ歩いたのではほんとにや  
りきれなかつたらう、とわたしは自分の責任でもあつたやうにひ  
どく心配した。併し、もう既に文珠前で中食を待つてゐるといふの  
だから、それも苦しかつた旅の一つの思ひ出となつて、今は心もの  
びん／＼としてゐることだらう、などとも亦た想像した。

百二十 御援助を賜り度く

拜啓春暖の候益々御清適奉賀候。陳者不肖今回本縣郡部有志  
諸君の推薦に依り、淺學菲才をも顧みず、郡部選出衆議院議員候補者  
に相立申候に付ては、特殊なる同窓の御交誼を以て何卒御援助を賜  
り度、實は拜趨の上親しく御願可申上の處不取敢書中を以て御願旁々  
得貴意候。敬具。

大正六年四月

(代議士の候補に立つた人が、同窓の誼みを辿つて援助を求めた書  
翰である。勿論、謙遜はよいことであるが、「淺學菲才をも顧みず」

とばかり言つて、少しも政見なり抱負なりを述べてないのは物足りなかつた。

百二十一 他日國家憲政の爲め

謹啓春暖の砌に御座候處貴家各位益御清榮の段慶賀至極に奉存候。陳者今回の衆議院議員總選舉に付當東京市部に於て候補に立たれ候三木武吉氏は我早稻田大學出身中唯一の憲政會公認候補者にして、其政治的技量の如き未だ充分に認むべき機會を得ざりしも、同氏の學識議論並に平素の行動より推測すれば、他日國家憲政の爲め有用なる人材たるべしと私に確信致居候不而已、前回の總選舉に際しては最高次點者として誠に氣の毒なる運命に陥られ候事として、特に今

回は相當の成績を以て當選の榮を擔はれる様致度存念に御座候に付、貴下に於かれても小生に對する年來の御厚情を同氏に移し當選相成候様御盡力相煩し度時節柄御迷惑とは存じ候へ共折入て御願申上候。

大正六年四月

高田 早苗

(これも衆議院議員候補者推薦状の一つであるが、早稻田大學の名譽學長から同大學の出身者に向つての依頼状だけに、何處かに別種の親しみが籠められてゐた。それに候補者の人物の保證といふ點に於いても可也に委曲を盡してゐた。)



百二十二 萬里異郷の情

おはがき難有う。

四月八日は當地の復活祭で、紅色のたまごを家にかざつて子供の御祝ひをします。春らしい気分になる祭日です。東京の花を思ふと萬里異郷の情がしなないでもありません。

御健康のことゝ思ひます。僕は幸ひ無事。皆皆様の御健康を祝ひます。四月八日。

(バリの吉江孤雁君から、復活祭のたまごを入れた籠を持った可愛い子供の繪はがきにかう書いて寄せられた。西洋にも春らしい気分

になる祭日はあるのである。丁度昔の日本に、雛の節句があつたやうに。)

百二十三 今では増築されて

今日戸棚を整理してゐましたらこんなものが出て來ました。今ではどん／＼増築されて大分面影が變つてゐますが、とにかく私はこんなところに苦しいやうな呑氣なやうな生活をしてゐます。

(前に前任地だといふ小學校の繪はがきを送つて呉れた青年から、今度は現任地の小學校の繪はがきを送つて呉れたのである。いかにも戸棚の中からも出て來たやうな古ぼけた、油染みた、墨さへは

つきりとはのらないやうな繪はがきであつた。

百二十四 亡妻の十日祭に

拜啓、来る十三日は亡妻の十日祭に相當 仕候。就ては午後三時より祭事相行ひたく候。御列座下され候は、故人の喜びなるべく候。御案内申上候。敬具。

四月十二日

(四月四日産後の子疳とかいふ病ひの爲めに、俄に窪田空穂君の細君が亡くなられた。其の前夜に見舞つた時に、わたしは重態であるとは思つたけれど、まさか、かうした俄かな事があらうとは夢にも

思はなかつた。それが翌朝からは、もう全く昏睡状態に陥つて再び意識を恢復しなかつたのだ。思つて見れば、人間の生命は儂い。雑司ヶ谷の墓地に、先き立つた二兒の傍らに葬つたのはまだ昨日のやうに思つてゐたに、それがもう十日祭となつたのである。

百二十五 曾て一度讀んだ時も

久しく御無沙汰いたしました。東京は今花の盛りとか。三月末か、四月上旬には出かける豫定で楽しんでゐましたが、色々の故障が生じて當分出られさうもありません。

中央文學で諸先生の「一兵卒の銃殺」評を拜見しました。上司先生の評に一番同感でした。

涼風君が東京から持つた來た「春」を讀んでから島崎先生のものが非常に懐かしく、今秦さんから借りて「家」を再讀三讀してゐます。家を持つた人の苦しみが色々な方面から窺はれて、何とも云へず身につまされました。會て一度讀んだ時もありましたが、今更に讀み返して見ると何となく色々なことが考へさせられます。

此間上諏訪へ行つたら秦さんが、

「〇〇先生の來たといふことが富士見の人々に悪く影響しましたね」と、人の顔をじろく見て云ふから、

「どうして？ どう云ふに悪く。」とホジクルと、

「どう云ふにツて、あれから、オメサマ達の生活が變つてゐる、其變り方が悪く變つてゐるから。」

で、私は暫く考へてゐました。近來の私や涼風君の生活をも、顧みるやうに頭の中へ浮べて見ました。

「まア今少し見てゐておくれ、好いにも悪るいにも、まだそんな結論をするには早い。」私がさう云ひました。

好くか悪くか、兎に角〇〇先生の來遊が私達の生活に影響を與へたことは、私達自身にも感じられます。愛慾のことについても、私は今考へなければならぬやうな位置に立ちました。

吉山さんが上京のことも前にきいてゐました。上京といふ時に富士見驛へ出てゐましたが、見えませんでした。何かの都合で汽車が變つたやうと思ひ乍ら、雨の降る中を又神戸の方へ歸つて來ました。先生からよろしく御傳へ下さい。そして奥さんや坊ちゃん達にも、左

様なら。

四月十二日

(どんな人でも年齢に依つて書物の読み方が違ふ。だから、少年時代に面白かつたものが青年時代に面白くなく、青年時代に面白くなかつたものが中年時代に面白くなつたといふやうな事があるのも當然である。この青年の消息が其處に觸れてゐるのを面白いと思つた。)

百二十六 留守中宜しく

出發の際は御挨拶もいたさず失禮いたし候。留守中よろしく願上げ候。二十一二日頃歸京の豫定に候。

伊豫松山にて。四月十七日。

(近所に住んでゐる親戚の者が、旅行先きから寄越したものである。既に九州の方をまつて來たので、熊本百景、水前寺の優趣といふ繪はがきに書いてあつた。)

百二十七 また少し發熱して

今日は春雨といふよりも五月雨に近いやうな雨が降つて、でなつくてさへ薄暗い部屋がよけいにうす暗くなつて居ります。世の中がどうなつたかも知らないで毎日、同じつまらない日をこゝに送つて居ります。歩く事さへ出來たら久しぶり故郷の春にも親しめるのですけ

れど、退院後また少し發熱してふせつて居るものですから……でも大した事にはならずだんく下つてまゐりました。諦めてじつと堪へてるだけつらいやうな氣もします。氣を揉んで泣きわめいたら、かへつてさつぱりしさうな氣もするけれど、どんなものですかしら。豫定通りだと昨日はもう上京してゐた筈なんですが。

とう／＼我儘をとほして〇〇はやめたさうでございますね。いろ／＼とお骨折りを頂きました。あらためて御禮を申し上げます。

何も彼も體が丈夫でなくては叶ひません、平凡なたとへだけれど、ほんとに鳥に翼がないやうなものですわ、その傷いた小鳥のさびしさをもつて、以前にもまして皆様の御健康を祈り上げます。

東京へ行つたつて、まだこのからだではどうしようもないんですけ

れど、一度いつて見たいと思つてからは何かなし行つて見たいんですの、見かけは血色もよし、それに可なり肥つても居りますよ。尤も、この體だから難物な病氣にも堪へられたのかも知れませんが。毎度ながら奥さまへは別にお手紙をさし上げません。どうぞ宜しくお傳へ下さいませ。さやうなら。

四月二十八日

(やつと退院はしたけれどまだ時々發熱するので身體が思ふやうにならぬのであらう。いくらかぢれてゐるやうな所も見える。水野仙子さんからの手紙である。)

百二十八 營業所設置の通知

謹啓

今般都合により左記へ營業所設置仕り候に付此段御通知申上候也

大正六年五月三日

麴町區有樂町壹丁目參番地

日比谷第一俱樂部内

阿 蘭 陀 書 房

電話本局 一〇二二三番  
三〇九二番  
五二五六番  
振替東京一四四八九番

(はがきにこれだけが印刷してあつて、脇の餘白にペンで住宅は何處と書き添へてあつた。)

百二十九 鈴蘭の花を胸へ

五月一日。パリには鈴蘭の花を胸へつけて春の魁つたサンボルに若い人々が涼しい瞳をひらめかして町々を歩く風習があります。ムゲエ・ド・メエといつて花賣の子が辻々で高く呼んでみます。昨日初めてセエヌの河畔をモオパッサンの舊居の邊まで行つて見ました。橡の若葉の美しさは到底日本で見られない初夏の飾りでした。五月六日

(此の頃はやる日本の花の日のやうに、慈善の意味などが附いてゐ

ないだけに、其の風習が奥床しく感ぜられる。橡の若葉の美しさを  
発見した所は、さすがは吉江君だと思はせられた。

百三十 展覧會を開催致し

謹啓、新緑の砌益々御清穆奉賀候。陳者、來る五月十一日より  
同十七日迄赤阪溜池三會堂に於て第四回展覧會を開催致し候間御  
來觀御高評の榮を賜はり度此段得貴意候。敬具。

大正六年五月

行 樹 社 同 人

前 田 晁 殿

(追て御來觀の節は此狀受附に御渡し被下度候)

(自信に依つて集つた人達が、進んで開催した繪畫展覧會の通知  
である。)

百三十一 出産の通知

拜啓、昨夜女子出生。母子共壯健に有之候間御安神被下度候。右  
御しらせまで。草々。

(はがき一面にかう達筆に書いてあつた。表面に發信人の名前も五  
月三十日といふ日附も書いてあつた。親戚からの通知である。)

百三十二 私は今夜行列車に

近日お伺ひしやうと思つて居ました。夕方圖書館から歸つたら從姉が死んだとの電報。残されたのは、七十六の伯母たった一人。私は今、夜行列車に居ます。まづもう、東京へ出て來る事は絶望らしいです。

(假令車を曳いても、新聞配達になつても、必ず志を遂げようと固い決心をしてはるゝと出て來た有爲の青年が、不意にかういふ不幸な出來事の爲めに歸國するのかと思ふと、本當にこのはがきを書いた時の心持までが思ひやられて胸の迫る思ひがした。)

百三十三 お正月に歩いた時は

出發の際はお見送り下さいまして難有う存じます。お土産物を渡しますと、父も母も喜んで居りました。よろしくお禮を申して呉れと申しました。

此處を今年のお正月に歩いた時は愉快でございましたね。今も一寸歩いて來ましたが、矢張り一人は物足りませぬ。

(暮から正月にかけて、わたしと一緒に旅をした友達が故郷の大坂へちよつと歸つて行つた。そして二人で一緒に歩いた道頓堀の賑かな繪はがきに、かう書いて寄越したのである。)



百三十四 痛切な問題なだから

昨日は折角来て下さつたのにおさうさう様でした。其の時の話では旅行するといふ事でしたが、その前には是非一度あひたいものです。こゝでいろいろ話を聞いて貰つて置き度い事もあるし聞かせて貰ひ度いこともある。僕も兩三日うちには夕方からゆく。それに僕は今度の田中銀八郎の事について田中銀之助に公開状を書き度いとおもふ心が強くなりました。かなり痛切な問題だから、それを來月の〇〇〇にのせて貰ふやうに頼んでくれませんか。僕にはこのことは風馬牛にして置けない問題の一つだから本氣になつて書かうと考へて居る。(十五六枚のものと豫定して居ます。)何もかも、それらの

事はおめにかゝつて、

右

草々

四日

盈 太郎

晁 兄

(六月三日は水野君の亡くなつた細君の三週忌であつた。これは其の翌日の手紙である。田中銀八郎の事といふのは、其の當時の新聞に少年の怪しき家出として可也大騒ぎされた家出の事件である。)

百三十五 古本で見付けるには

山國はいつ迄も寒くまだ火燧を用ゐてゐます。

丁度去年の今頃は、田山先生を初めてお迎へした頃ですが、彼の頃は單物でしたが、今年に裕を重ねてまだ寒いやうな日があります。御忙しい所へ甚だ恐れ入りますが、「高僧遺文録」を読みたいと思つて、上諏訪の本屋へ命じて見付けさせました所、目下品切れで、古本で見付けるより外はないとのこと、非常に残念に思つてゐますが、東京の古本屋あたりに命じて見付けさせる方法があつたら、御教示下さい。御迷惑ではありませうが御願申します。

(欲しいと思ふ書物も地方にゐては手に入れにくいともある。さういふ場合に東京の古本屋に捜させれば何でもないのであるが、捜させる見當がつかぬと見える。それは兎に角、六月五日といふのに

まだ火燧を用ゐてゐるとは、いかに寒い富士見だからとて本當に驚かされる。)

### 百三十六 自由な廣い道を

いやな梅雨期を前に控へて、暑かつたり寒かつたり、定まらない氣候でございますね。

皆さんお變りもなくお過しでゐらしゃいますか。私もこちらにかへつてからかれこれもう一年、早いものですこと、これで東京に出て見たらよつほど土くさくなつてゐる事だらうとひそかに思つてゐます。ともかく夏を過してから、もう秋になつたら、其時こそ快くても悪くても上京したいと思つて居ます。此頃は降參して精神療法をうけ

て居りますが、もう三期ばかりになります。一度も靈動がありませんが、其後大分ぐあひがいゝやうな氣がして居ます。せいゝく長くやつて頂かうと存じて居ります。此程は社をおよしになられたさうでございますね。一寸耳に挟んで意外なやうな意外でないやうな氣がいたしました。ごんな風になつていつたものか委しくは存じませんが、遠からず何か問題が起るだらうといふやうな氣はあの時分から感じられて居りました。

しかし、あの汚いところから自由におなりなすつたことをお喜び申上げます。さうして今、思ひの外早く目の前に展かれた自由な廣い道を御機嫌よくお進みになられることゝ存じ上げます。

生活はやはり病んで寝てるものゝ上にも夫々に營まれて居ります。

しかも思ひの外心のもちやう次第によつては樂なものであることを悟ることが出来ました。私もまだ寝ながらぼつと短いものなど書いて居ります。書くといふことよりも働くといふことが今の私には樂しみになつて居ります。けれど少々長いものになるとまだ手が出ません。書かない先から疲れてしまふやうな氣がして。

どうぞ大事な健康に御留意下さいますやうに。

六月八日午後

(一年と八ヶ月ばかり、従事してゐた職業を俄に止すことになつて五月の末からまたもや浪々の身となつた。それを却つて喜んで、自由を祝福して寄越されたのがこの手紙である。その地位から解放さ

れたことは、自分でも可也幸福に感じてゐたので、自然と人にもさう感じられたのであらう。文中に精神療とあるのは、例の川上氏の遠隔治療のことである。

百三十七 考へて見ると

昨夜は失禮。其節御約束せし富士見行は、考へて見ると、何うも行つてゐられさうにもありません。それも小説の都合ですが、成るだけ行きたいとは思つて居りますけれど………

十一日。

(前夜、一緒に行かうかといふやうに言はれた旅のことを、なほ考

へ直されて見てのはがき。田山さんの紫鉛筆の走り書きである。

百三十八 新本にて結構に候

御厄介のことをお願い申し恐縮に存居候處早速御調べ御知らせ下されありがたく御禮申上候。新本にても古本にても、其書物が手に入りさへすれば結構此上なしに候。尙新本の方が見付け易く候は。新本にて結構に候間何分共御願申上候。目下當地は漸く初夏らしく相成、今日など梅雨晴れにて何とも云へぬ好き気分が致し候。是非々々御出かけ下され度待ち居り候。取り敢ず御返事迄草々。

(古本を捜して呉れるやうにと頼まれた「高僧遺文録」を、古本屋に

捜させた結果を知らせてやつた返事である。)

百二十九 英語獨習の書物を

前略。長男が今年中學に入つたが、英語には閉口してゐるらしい。何か最も適當なる英語獨習の講義録か又は著書などお知らせ下されたく願上げ候。

六月十二日

沼 津

瑠

(沼津で判事をしてゐる舊友から其の地の名勝、黒瀬橋の富士といふ繪はがきに書いて寄越されたものである。これも地方にゐると適當な書物の手に入りにくいことを語つてゐる。)

百四十 記念の爲め文録を

拜啓、高堂益御清穆之段奉大賀候。陳者弊館備多年御愛顧を蒙り御蔭を以て漸次發展致今年六月十五日創業滿三十周年に相達し候間特に帝室技藝員高村光雲先生に請ひ記念の爲め文録を鑄造し贈呈仕聊か平素の御懇情を奉感謝候。敬具。

大正六年六月

博文館 大橋 新太郎

(記念品を贈呈するに就いての挨拶状である。)

百四十一 香りの強い山獨活を

山獨活を少しばかりお送りいたします。茹でて、酢にかなどして、晩酌の下物にでもして下さい。

山國にはこんなものは澤山あるのですが、先生の嗜好に適するかどうかと思つて、少しばかりお送りいたします。自然生の物ですから萌やし獨活より香りなどは強いですが、夫が人によつて好くもあり嫌ふもありします。兎に角まあ召し上つて見て下さい。

(都會では食べたたくても食べられないかういふ物が、田舎には無限にある。この山獨活なども、少し香りが強過ぎると思つたが、い

かにも山の物らしい風味があつて珍らしく味はれた。)

百四十二 日蓮遺文集なら

十四日出のお葉がき拜見いたしました。「高祖遺文録」でよいのです。「高僧……」といふのが別にあるのではないでせう。私は只書名を人から聞いた丈でしたから、私の想像で「高僧」と思つたのです。日蓮遺文集なら私のさがす本に違ひありません。何卒本屋の方へさう云つて下さい。色々御手数様恐れ入りました。代金はいくらですか？ 早速お送りいたします。

(古本屋がやつと捜し出したといつて持つて來たのを見ると、それ

は『高祖遺文録』であつた。「高僧遺文録」といふ本はないらしい。さう云はれて見れば、考へて見るまでもなく、尤もな話だ。多分「高祖遺文録」でよいのだらうとは思つたが、それでもどうかと思つて、日蓮上人の遺文集を求めてゐるのではないか、と聞き合せて見た。これは其の返事である。）

百四十三 書物の代を小爲替で

書物を色々御手数ありがたう御座いました。大部に驚きましたが、努力して讀破いたし度いと思つてゐます。

此方は今明日位で大抵田植がすみます。御都合が出来たら御遊びにお出かけ下さい。

書物の代を小爲替で加封お送りいたしますから御查收下さいませ。

六月二十日

(いよく)『高祖遺文録』でよいことにきまつたので、早速送つてやつた。すると直ぐに其の代金をとて送つて寄越した。)

百四十四 轉居の通知 (四)

拜啓

向暑の候御健勝を祝します。

轉居いたしましたにつき、御通知申し上げます。

牛込赤城下町五十三

六月二十三日

小川健作

(軽く暑中見舞を兼ねながら、轉居の通知をした形である。)

百四十五 伯母の世にある間は

こんど上京する時は、全くの一人となります。今でも出れば出られぬ事はありませんが、七十六歳の老婆は子に逝かれては、今は私を一番便りに思つて居る様です。私は伯母の世にある間は、村に居て小学校へでも出て居ませう。とにかく今は、文學は私にとつては離れる事の出来ぬものとなつて來た様に思ひます。以前の様な自棄の心は今はありません。自愛します。

(俄に姉従に死なれて歸國した青年から寄越したはがきである。まだ若くして父を失ひ、やがてまた母を失ひ、次ぎぐに近親を失つた青年は、ともすれば自暴自棄に陥りさうな傾向があつた。わたしは深くそれを恐れて機會のある毎に持つて生れた天分を大事に育てるやうにと戒めてゐた。自分で自分を輕蔑するほど愚な、そして恐ろしいことはないからである。)

百四十六 微々たる役人として

今年(ことし)は暑氣殊(じゆきこと)に甚(はな)しく候(さふらふ)處如何(さふらふやう)に候哉(さふらふやうか)伺(さふらふ)上げ候(さふらふ)。先頃(さきごろ)は御手數相掛(おてかやあひか)難有存候(ありがたくぞんじさふらふ)。小生(こせい)此(こ)の頃(ころ)の生活(せいくわつ)は唯(ただ)微(び)



々たる役人として平凡なる生活に御座候。都合致し月末か來月初め一寸上京致したくとは存じ候へども如何相成るやまだ分らず候。

(中學に入つた長男のために、英語獨習の書物を問合せて來た舊友から、それを知らせてやつた禮を兼ねて、近況を知らせて寄越したのである。脇に小さく「君も一寸出て來ては如何」と追て書きが附けてあつた。)

百四十七 却つて苦痛を覺え

「三十年」は病院にて通讀しました。

初めは軽いと思つてゐましたが、注射をされると痔がはれて來て、

却つて苦痛を覺えてゐます。中々長くかゝりさうです。病院行を後悔してゐますが、いぢられた、め痛くなつて今更中止が出来なくなりました。成るべく我慢して會へは出席するつもりですが、今日のやうではどうにも外出しがたく、あるひは缺席の虞があります。(幹事として會費は出缺の有無に關はらず拂つてもよろしい。)肛門にサクランボのやうなものが出來たのです。

(龍土會の相幹事になつてゐた正宗君からののがき。)

百四十八 出席不可能ゆゑ

今日より入院仕候。

龍土會は出席不可能です。誰れか代りに幹事になつて貰つて（〇〇君にでも）小生は次回にのばしてくれませんか。

（いよく出席不可能になつたといふ知らせである。併しこの時にはもう通知を出した後で、幹事をかへる譯には行かなかつた。）

百四十九 此方も日中は暑く

啓、あれから長野驛の待合室に行つて見ると、あてにしてゐた仲間が居ない、爲方なしに驛前のふち屋といふへ泊り、翌朝、雨中を仲間（矢々崎）の家へ行つて見ると、社用で木曾へ行つて留守との事で、初対面の細君ばかりであつた。風間君に逢ひ、次手に婆やの事もきめよ

うと思つて訪ねると、風間君は上京中。婆やは遠方へ行くのはいやだといふので、こゝもつまらなく済んでしまひました。驛へ来て見るとまだ時間があるので、思ひ附いて理髪をして、十二時過ぎの列車に乗りました。

例の追悼録、歸つて來ると急に書け出して、もう半分足らずを書いて了ひました。それ迄は何うしても書けず、書けない爲に註文が附いて、益す書けなくてゐたものです。今は一切註文を棄て、表面の事だけを書いてゐます。知つてゐる事を書く事の如何に困難であるかを思はずには居られません。原稿が出来たら上京とは思つてゐますが、場合により校正位は此方であるかも知れません。それはとにかく、印刷の體裁をお考へを願ひます。自分では迷つて駄目です。本の形、組

の體裁など、一に兄に願ひます。表紙は節三に、印刷の方の世話は森園天涙君といふ人が爲て呉れる事になつてゐます。

雑誌の選歌は此狀より少し先に出しました。二日かゝりました。歌も雜筆も、追悼帖に没頭してゐた爲に出來ずにしまひました。何よりも此れをしてしまひ、それから自分の事をしようと思つてゐます。一、新刊紹介をしないでは濟まないものもありますが、それも次ぎの號まで延ばさせてもらひます。

御近況如何、さぞ暑い事です。此方も日中は暑く、一兩日前までは、坐つてゐても汗がにじむ程でした。

村落の生活も一月半になります。いろ／＼の新たに思ひ得た事もあります。再び厄介者の弟息子のやうな心になつてゐますが、妙な事に

は、それに反抗せずになられます。こんな境を描いて見たいとも思つてゐます。

細君に宜しく。

十八日朝

前田 兄

窪 田

(七月の始め、一緒に越後の方へ旅をした窪田君から、四日の朝の三時といふに長野驛で別れて後の始めての手紙である。追悼録といふのは四月の始めに俄に亡くなられた細君の追悼録で、雑誌といふのは窪田君が歸郷中、わたしが代つて編輯の面倒を見てゐた同君主宰の「國民文學」のことである。)

百五十 観劇券に添へて

來月は市村座菊吉連に御座ります。

己の七月

唐犬權兵衛

菅手町様

(帝劇の観覧券に添へて、ちよつとしやれた形で、かう言つて来た。)

(終)

大正六年八月二十日印刷  
大正六年八月廿四日發行

定價九拾五錢

著作者

前田

晁



發行者

北原義雄

著作  
所  
有  
權

印刷者

安田徳治郎

印刷所

健捷堂印刷所

發行所

東京市麴町區有樂町一丁目四番地  
書店 了

電話本局四九七三番  
振替東京二四八八八番

近刊

田山花袋氏著 趣味の紀行文

北原白秋氏著 歌集雀の卵

小杉未醒氏著及畫 支那畫觀

三宅克巳氏著及畫 水彩畫の描き方

中村八郎氏著 どうして小兒を育てるか

(小兒の才能を自由に發達させる最も自然な小兒の育て方)

大矢好治氏著 西洋草花の作り方

終